

---

# 【琉球・オブ・ザ・デッド】

トムゾンビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【琉球・オブ・ザ・デッド】

### 【Nコード】

N6888T

### 【作者名】

トムゾンビ

### 【あらすじ】

沖縄でゾンビが大量発生！ 平和な島は一気にゾンビアイランドと化す！ 主人公のB級ホラー作家のD吾アマチュア（27歳）と愉快な仲間達は人喰いゾンビ達との生き残りをかけた激しい攻防戦を繰り返す！ 生きていた時の習性を残すゾンビ達！ やがて進化するゾンビ達！ そしてD吾達はゾンビ発生の原因を解明しながら事件を解決するとかしないとか。

**LV1【発生】（前書き）**

主人公（D吾）の語りから始まる。

## LV1【発生】

### LV1【発生】

ニュースによると沖縄では2日前ぐらいから死者が蘇って生きた人間や動物に噛みつき、肉を喰らっているらしい…

蘇った死者は動きは遅いが怪力で、噛みつかれた人間や動物はまるで感染するがの如く映画やゲームでよく見られる【ゾンビ】のようになり新たに生者の肉を求めると言う…

感染のスピードは個人差があるらしいがまだ詳しい事は分かって無いらしい。

ニュースではゾンビと言わず【暴徒】と言われ、または謎のウイルスによる【感染者】ではないかとの指摘もされているが原因は不明。

感染源や感染経路（空気感染もするのか等）も依然として不明。

YouTubeなどのネットによると肉を喰らう場面が生々しく写されていて“これはゾンビだ！”と言う声が多数あがっていた。

…おっと！堅苦しい文章ばかりで申し遅れたな！

俺の名は【D吾】！！

B級ホラー作家を目指しており、いずれは監督もやってみたいと思っている隠れた天才沖縄人であり、美男子でもある27歳の好青年だ！

だけど貧乏していてな。

一週間前【弟のまさる】と開発段階で怪しげな試薬品の【ZW】と書かれた青いカプセルを飲む人体実験のアルバイトに行つて来たよ！

何しろ1粒飲むだけで【2万】だぜ！？

怪しいと思つても金欠病に効く薬なのは間違いないぜ W

それに俺達以外にも何人が来てたしな！

俺はホテルのシーツを洗うランドリー工場で働いてるが今日も工場ではゾンビ事件の話して持ちきりだった！

ただこんな状況だからか休んでる人が多くて仕事が大変だったな。

今日も夜中までパトカーやら救急車やらのサイレンがうるさい。

…明日も朝7時から仕事だ！

俺は毎日夜10時に寝て朝5時には起きてる。

もう10時になるな…

今日はもう【オ ニー】して寝よう！！

LV1【発生】(後書き)

すつきり

ねふねふ( ) > W > > ( )

**LV2【異変】（前書き）**

ちなみにうんことしっこをいっぺんに出せるのは日本人だけらしい。

アメリカ人とかはいっぺんに出せないらしいよ。

b y つんちく博士

## LV2【異変】

### LV2【異変】

朝、目を覚ますとやけに明るい…時計を見ると朝の8時…遅刻だ！

俺は急いで水を飲みながら便所でうんことしっこをいっぺんに出しながら、会社に電話をかけた！…

あれ？…誰も電話に出んわ…

つまらん洒落を言ってる場合じゃ無い！

車を出すと外はやたらとパトカーや救急車、消防車が走っていた…

「うわっ！？あちこちで事故ってる！？」

道路は事故車で散乱しており、横転したり火を吹いたりしてる車もあつた。

「ひどいなこりゃ…まあ、パトカーや救急車もあちこち走ってるから“何くるないさ”！！」（何とかなんべ！）」

俺は車を飛ばして工場に駆けつけた！

だが…工場は稼働しておらず静かだった…

くさい。…何だこのどよんとしたくさい臭いは？まるで腐敗臭が漂ってるような…



人の姿も見えない…

「おゝい！遅刻してすみませうん！誰かいませんか？！」

俺は工場の中に入った！すると悪臭はどんどん強くなり、よく見ると壁や地面は赤い液体でビチャビチャになっていた！

…何だこれは！？【血】！？

俺が口をあんどり開けていると何やらうめき声が聞こえた！

ひううう…ひううう…

おいおい…何だこの気持ち悪い声は？…まるで地獄の底から聞こえてくる声のようだ…

とつても嫌な予感がするぞ…

《ずさ…ずさ…》 《べちゃ…べちゃ…》

足を引きずるような音や湿った音が聞こえる！！

…そしてそれは姿を現した。

ひあああ…

…マジかよ…

それは髪を茶髪にしたチャラチャラした格好の若い工場専属の運転

手だった。

(俺の職場の運転手は大半がこんな感じである)

しかし口の周りは血でベチヨベチヨだった…

手に何か持って…

「【手】！？手に人間の手を持つてる！！」

運転手は手に持った【手】をムシャムシャと美味そうに喰い初めた  
！！

「あわわわわ！！」

俺はこれを見て一瞬のうちにいろんな事が脳裏をよぎった！！

( “やべ” … “手を喰って” … “ゾンビ!?” … “逃げ” … “恐っ  
！！” “殴れ!!” … “足ガクガクして動け” … )

《じゃ ！！》

気が付くと俺はナイアガラの滝の如くたっぷりと【おっこ】を漏  
らしていた！！

27歳の夏の日の出来事であった…

そして【元運転手】が俺に気づいた。

ひつう？…つあああ



LV2【異変】（後書き）

おしっこを漏らしてしまったD吾!!

いったいどうなるんだ!?

**LV3【珍トリオ結成】（前書き）**

珍妙な2人組が助けに来てくれたぞ！

### LV3【珍トリオ結成】

元運転手が腕をチキンのようにほおばりながら俺に近づいて来た！

「うまうま…ううう」

俺「うわ…口から垂れた血管がエグい…俺も喰われるのか!？」

その時だった!!

《バツカーン!!》

いきなり元運転手の頭が血飛沫をあげてそのまま地面に倒れ込んだ!!

？「男は黒髪短髪!」

？「あんらまあ〜!」

俺は誰かと思つて見たら、それは同じ工場で働いてる角刈りのおっさんで顔がモアイに似たアゴの長い通称アゴさんと、今年40歳になるミスタービーンに似た国吉かずお君だった

アゴさんが鉄パイプでゾンビの頭を殴つたのだ!!

アゴさん「まったく男がこんなチャラチャラした格好して!日本人は黒髪短髪つて昔から決まってるんだモゴ!D吾はこんな格好するなよ!モゴモゴー!」

正直今そんな事はどうでも良かったが、いちおう助けてもらったのでお礼を言っておいた。

ちなみにアゴさんは喋る時モゴモゴする癖があるので【アゴモゴモゴ】と言つあだ名もある。

かずお「あい〜！D吾しっこ漏らしてる〜！きつたな〜い！」

俺「かずおだつて前にうんこ漏らして泣いて帰ったでしょ！？あの時皆くさいくさいって言つてたよ！」

アゴさん「そんな事よりここから脱出するモゴー！」

【珍トリオ】結成だ！！

かずお「あどべ〜ん、ちゃあ〜！」

アゴさん「や〜うるさい！“まが〜あびーしてからに！”（大声で叫びやがって〜）」

明らかにアゴさんの声の方がうるさかったが、アゴさんは単純で短気な性格なので怒つてかずおに【アイアンクロー】をし始めた！！

かずお「へえ〜い！！！」

俺「2人とも静かにしないとゾンビが！…ああ！？アゴさん後ろ！！！」

ひっつあぁぁぁ

いつの間にか1体のゾンビがアゴさんに近づいていて、いきなりアゴさんに噛みついたではないか!!

アゴさん「あが〜!? D吾ー! 助けてくれ〜!...」

しかしゾンビは容赦なくアゴさんを噛み続けた!

《グチャグチャグチャー!!》

アゴさん「モゴモゴモゴモー!!」

D吾「ああ!? アゴさんが殺られた!!」

かずお「助けて〜!! アンパンマン!!」

かずおは泣きながらよちよちと逃げ出した!!

しかしその方向にもゾンビが!!

ひつう〜!!...

かずお「へえ〜い!!」

俺「かずおー!!」

珍トリオ解散だ!!



LV3【珍トリオ結成】（後書き）

ご愁傷様です。

チーン（\*|\*）

## LV4【初戦】（前書き）

2人は死んでゾンビになっちゃったのでここからはビビりながらも  
初バトルです！

## LV4【初戦】

### LV4【初戦】

彼らはゾンビ達の手中に落ちた…

そしてあごさんを喰ってるのは、小心者で胃が弱いはずの年配の上司の仲本さんだった…

仲本さんは最初あごさんのあごに噛みついてたが、食べにくかったのか、腹の肉を喰い破り、今や内臓を口に入れ《ぐちゃぐちゃ》と噛んでいた。

「仲本さん…そんなの食べたらまた胃壊すよ…」

そう言いながら、俺はあごさんが落とした鉄パイプを拾った

仲本ゾンビが俺を見た…!

ふうう？

《グシャアツ!!》

俺は仲本ゾンビが振り向くと同時に鉄パイプを頭上に振り下ろした  
!!

嫌な感触が伝わり仲本ゾンビの頭蓋骨が割れ、

脳みそをボタボタ垂らしながらズサツと地面に倒れた…

「俺は筋トレしてるんだバカヤロー!!」

俺は十八番の【たけし】の物まねをしながら言ってやった!!

ゾンビとは言え初めて人をこんな風に殴って殺した…

しかし躊躇なんかしてたら死ぬ。

暴力に対抗するには暴力しか無い。

俺はゾンビ小説を書く為にゾンビについていろいろ勉強してたのだ。

頭ではどうすれば良いか分かってる。

後は勇気を出して行動するだけだった。

すると死んだはずのあごさんが腸をひきずりながら地面を這いつくばって来る…

「もーっ!!」

こんな【ぐちゃみそ】の状態で生きてる人間などまずいない!!

俺「うっ!!…やはり死んだらゾンビになるんだ!!…成仏しろ!!」

俺はほふく前進で近づいて来るあごゾンビの頭に思い切り鉄パイプを振り下ろした!!

あごゾンビの頭が肉片や骨の破片をぶちまけ破裂した!!

しかしあごだけは頑丈なのか、吹き飛ばさずそのまま残っていた…

その調子でかずおとあごさんを襲った2匹のゾンビも片付けた!!

動きがかなり遅いので、思ったより余裕だったが油断大敵である!!

油断は即【死亡フラグ】に繋がる!!

すると血まみれのかずおがムツクリと起き上がった!!

ひうっひ

俺「かずお…お前もか…」

俺は鉄パイプを構えた!

近づかずお!

俺はとっさにこう言った!

俺「あどべくん?」

ひちやっあ〜!〜!

俺「ええっ!?!…ウーロン?」

ひちやっあ〜!〜!

俺「加藤?」

「ちゃあ〜あ〜!〜!」

俺「…おうちへ帰りなさい!〜!」

「へえ〜い!〜!」

かずお「ゾンビはおうちに帰って行った…」

LV4【初戦】（後書き）

いゝいな、いゝいな

にゝんげんっていゝいな

かえるかえろおうちへかえろ

まん まん まんぐり返しでバイバイバイ

LV5【退職】(前書き)

そんなこんなで退職。



## LV5【退職】

こいつらはいったいどうなってんだ？

知能はあるのか？

映画通りのゾンビで噛まれたら感染するのか？

そして何よりどうしてか？おは俺の言う事に反応しておうちに帰ったんだ？

生きていた時の習性がわずかに残ってるのか！？

余裕がある時にゾンビで実験しているいろ調べてみる必要があるな。

…とにかくもつと何か武器になる物を探して脱出しよう！

確か【あれ】があったはずだが…おっと！？

俺は物陰に身を隠した！！

ハああああ

何故なら通路には無数のゾンビ達がいたからだ…

ゾンビが腸を奪いあってる！

まるでウインナーみたいだ！

《ぐちやる！ぐちやびちやあ！》

無我夢中で腸にかぶりつくおばさんゾンビも柄物のほっかむりをしてるせいかドイツ人っぽく見えて来た！

何だか俺もソーセージつまみにビール飲みたくなって来たぜ！

そう言えば朝から何も喰ってねーや！

生きてここを出られたらとりあえず一杯飲もう！…おや？

あつたぞ！【釘打ち銃】だ！

これさえあればここに用は無い！

…うがああ…！…

「おお！？工場長！？」

いきなり工場長ゾンビに組み敷かれてしまった…！

工場長ゾンビが俺に噛みつきこうしてる…！

「うわっ！？力強っ…！…工場長…！俺、今日でこの糞つまらない工場辞めます…！」

俺は釘打ち銃を工場長の頭に一発ぶち込んだ…！

…うう…？…

工場長ゾンビは手の動きを止めたが、釘打ち銃は威力が低いのか

発では死なず、もう2発を眉間に打ち込む事でやっとな絶命した！！  
工場長ゾンビをどかすとベルトにハンマーが差し込んであったので  
頂戴した！！

釘打ち銃は重くてけっこうデカいから両手でしか持てないので鉄パイプは泣く泣く手放しす事にした。

「仲間がいれば鉄パイプを渡せるのになあ…さっ！もうこんな所は出よう！まずは水と食料を確保しに行こう！！」

俺はハンマーをベルトに差して両手で釘打ち銃を抱えながら何とか俺の車が停めてある駐車場までたどり着いた！！

車を出して工場を出ると何だか自由になれた気がした。

退屈な毎日、つまらん仕事。

ある意味、俺も死人だったのかもしれない…

LV5【退職】（後書き）

この話しを読むとhideのピंकスパイダーが聞きたくなるね。

## LV6【ミンビュザ】（前書き）

この話の最初のサブタイトル（mixi版）はLV6【むぬかんぎ  
く】だったんですね。

沖縄の方言で（物思い）と言う意味ですが分かりやすくしようと思  
ってこのタイトルに変更しました。

## 「Lv6【ゾンビムサ】」

俺は工場から車を走らせながら考えていた。

…まずはスーパーかコンビニで水や食料とか必要な物を手に入れるか…

今ならまだゾンビの数はそんなに多く無いかもしれん。

食料の確保は他の人間も考えてるだろうし、街がゾンビだらけになつたりしたら街をうろつくのも命がけだし、食料の中には腐る物もある。

時間が経てば経つほど食料の確保は難しくなる。最低一週間は籠城できるぐらいの水と食料は必要だ…

それにしてもゾンビって臭い。

腐ったらもつと凄いんだろ…な…

こいつらはどうやって獲物を探知してるんだ!?

視覚?聴覚?嗅覚?

情報が欲しい…

自分でもゾンビを使い直接調べて見なければ…

《ドッカーン!》

そんな事考えて運転してたらいきなり飛び出して来たゾンビにぶつかった!!…

(多分ゾンビだろう!)

ゾンビは勢いよく回転しながら空を真っ直ぐ舞い、放物線を描きながら7メートルは吹っ飛んで電信柱にももの凄いスピードで顔からぶつかった!!

ゾンビは電信柱から《べチャツ!!》って感じで落ちた!!

思い切り投げて壁にぶつかったトマトみただった!!

…名づけて【ゾンビサイクロン】

…言ってる場合じゃねえ。

俺は吹っ飛んだゾンビの場所まで車を走らせ運転席の窓越しから事故現場を見てみるとゾンビの顔はほとんど吹っ飛んで後頭部の当たりしか残って無かった!!

グロい…ん?

何か動いてる?…

【うじ虫】!?!?

顔の中にびっしりと大量のうじ虫がうじゃうじゃ蠢いていた!!

電信柱を見ると血の流れにそってそこにもうじ虫がびっしりとつい

てたのだ!!

「おええー!!」

俺は窓からびちゃびちゃとゲロを吐いた!!

現場はぐちゃぐちゃの【死体】と【血】と【うじ虫】が乗ったピザに俺が【ゲロ】のトッピングを追加した状態になった!!

【ゾンビピザ】だ!!

これでは【うんこ】さえあれば完璧…

《グルルル!!》

「やつけー! (ヤバイ!) 糞まりたく (糞したく) なってきたぜ! せっかくリーチだしここでしようかや? : ダメだ! ここではできん! だって紙が無いもん!!」

おしりを拭かないと気持ち悪いので俺はけつ拭き紙があるトイレを探しに行く事にした!!

近くに公園があるので公園に向かい窓から様子を見るとゾンビの姿は今の所見えなかった! ラッキー!

釘打ち銃を持ち車を降りて用心しながらトイレの中に入ると

「カア〜!!」

と言う声が出て俺が



「うわぁ!?!」

と叫ぶと同時に俺の肛門から

《ブリッ!ビチィ!》

と音が聞こえたのはほぼ同時の事だった!!

「V6」ペンペンザ【後書き】

とうとううんこ漏らしちゃったよ…

何だ？この主人公…

1つもカッコ良く無いぞ。

LV7【便所の神さま】（前書き）

公園のトイレって汚いんだよね？。

## LV7【便所の神さま】

「ハカア〜！バサバサバサ！」

声の主はただのカラスだった…

カラスはトイレの窓から飛んで行った…

俺は糞をもらした…

こんな状況ではしょうがないと自分に言い聞かせてもいい年したおっさんが1日に小便とうんこを漏らすと言う大失態を犯したと言う事実には悔しくて情けなくて涙が出てきた。

トイレは3つあり、俺は泣きながら一番奥のトイレに入った。ズボンとパンツは糞と小便ですっかり重たくなっていた。

俺はパンツをその場に捨てた。

「そうだ…こんな時は歌おう！確か何年か前に【便所の神様】って言う歌が流行ってたな！あの歌を歌おう！」

俺はうんこをしながら歌う事にした！

「便所には〜それは〜それは綺麗な〜」

《ぶりぶりー！！》

「神様が〜いるんやで〜」

《ぶりっ！びちいー！！》

「便所の神様は〜右手で小便を受け止め〜 左手でうんこを受け止めて〜 □では〜タンを受け止めるんやで〜」

《ぶりぶりっ！ぼとん！ぼちゃん！》

水がけつに跳ね返って来た！！

「うわっ！？うんこの勢いが強すぎておしりにおつりが！！汚ねーな！！だいたい何で朝も糞したのにこんなに出るんだ！？」

その時だった！！

ハああ〜

女の呻き声がした！！

「ん？便所の神様か！？…いや…違つこの声は…」

《ツカツカ…》

ハうう〜

ハイヒールで歩く音が聞こえ【それ】は男子便所の中に入って来た。

そしておぼろげな足音と声を出しながらそれは確実に近づいて来た。

{ぐんぐん…}

《ギィ》

絶対ゾンビだ…

一番端の便所を覗いてるのか？…

どうして人間がいるって分かるんだ？

《ツカ…ツカ…ボタン！》

ひうら〜？！

「ヤバイ…すぐ隣にいる…もうどうやって来たとかどうでも良い…早くおしりを拭いてこの場を脱出しなければ…！」

俺は急いでおしりを拭きはじめた…！

《カラカラカラー！》

《フキフキフキー！》

ひうら！…？！

女ゾンビがけつ拭き紙のロールを回す音でこっちに気づいた…！

《バァン！バァン！》

ひあああ〜…！…！

「ヤバイ…！ゾンビの力は強いからドアを破られるかも…！…ああ！でもあと1回はおしりを拭かなければ…！」

俺は片手で便所のドアを押さえながらおしりを拭いた！！

ぷうあま〜！！！！

《バンバンバンバン！！》

「止める糞あまー！！！！ここは男子トイレだぞー！！！！」

LV7【便所の神さま】（後書き）

これはピンチだぞ!!



LV8【局部はハイになる】（前書き）

おしおきの時間だ。

## LV8【局部はハイになる】

俺はズボンを履き、釘撃ち銃を持つとトイレのドアの鍵を外して思いきりドアを蹴飛ばした！

すると女ゾンビは吹き飛ばされて派手に地面を転がりながら向かいの壁に頭から激しくぶつかりと足を思い切りおっぴろげてケツを真っ直ぐ宙に突き出したままの形で静止した！

俺は女ゾンビに近寄ってよく見てみると、女ゾンビは血まみれだったが、けっこう美人で明るい茶色に染めたストレートロングの髪が似合ってた。

女ゾンビはグレーのOLっぽい制服を着ていた。

バサッとスカートがめくられて黒い下着が露わになった。

女ゾンビは壁に頭を強打したせいか意識が朦朧としてるらしく、恥を知らねばならぬ格好のまま動く事ができないでいた。

「俺のうんこを邪魔する奴は何人たりとも許さん！」

俺は女ゾンビに歩みよるとおもむろに釘撃ち銃を股間に押しつけてこう言った。

「釘ぶっこんでやんよー！！」

釘を6発あそこにぶちこんでやった！

「ああ〜…」

「何だこいつ！？気持ち良いのかコノヤロー！！」

俺の中の凶暴な【たけし】の人格が再び目を覚ましてしまった！！

「お〇んこがダメだったら菊の門にブチこんでやんよバカヤロー！！」

菊の門にも6発ブチこんでやった！！

これでこいつは殺人鬼のアルバート・フィッシュみたいな状態になつてるはずだ！！

「ああ〜…いい〜…」

「いい！？ご褒美になっちゃってんじゃねえかバカヤロー！！」

実験の結果、やはりゾンビは痛みを感じ無いらしい。

女ゾンビは涎を垂らしてまんざらでも無い顔をしていた！！

「俺の中のたけしの人格まで出させといてナメやがって…イキそうなのか？このたけしを怒らすとどうなるか思い知らせてやる！！」

俺は釘撃ち銃を女ゾンビの額に押しつけて力強くこう言った。

「お逝きなさい！！」

最後別の人になっちゃった。

《バスッバスッバスッ!》

釘を眉間に3発ブチ込むと女ゾンビは息絶えた。

「くっそ…何で生きてる時に出会わなかったんだ!」

俺は悔しくて壁を殴った!

ぷっつん…ぷっ

ヤバイ!別のゾンビが入って来た!

俺は窓から逃げる事にした!

窓をよじ登り窓に頭を入れ周囲の様子をうかがった。

今視界から見える範囲にはゾンビの姿は無い。これなら車まで行け  
そうだ!

俺は窓から体を出し、もう少しで外に出れそうな時に…

《ガシッ!》

「うわっ!?!」

ゾンビに足をつかまれたのだ!!

LV8【局部はハイになる】（後書き）

目指せ！！

実写化！！（ ）

LV9【アフル!?!】(前書き)

1難去つてまた1難。

そしてまた1難。

そしてまた…

## LV9【ア フル!?】

ゾンビはあちこち喰い千切られたような跡があり、左腕が無かった。右腕だけで俺の左足をつかんだのだ!

その唯一の右腕も損傷が酷く腕の肉はあちこちえぐられて骨までかじられた形跡があった。

かなり脆くなってそうな割には握力は強かった。

「離しやがれ!死にかけ野郎!」

奴は俺の左足を噛もうとしたが俺は噛まれ無いように暴れながらゾンビの顔に思い切り蹴りを入れた!

すると脆くなってた為か、蹴った勢いでゾンビの右腕が俺の左足を握ったまま千切れた!

「うわっ!?こんなもん返すぜ!!」

俺の左足をつかんだまま千切れたゾンビの右腕を外そうとしたがかなり足首に食い込んでいた!

「んぎぎ…くそ!なかなか外れん!…おや?何か千切れた断面の所が動い…うわっ!?うじ虫!?!」

またしても大量のうじ虫が蠢いていたのだ!

「気持ち悪っ!…でも…うじって体内にわく物なのか?」

ゾンビに関してはいろいろ疑問はあった…

なぜ死んでるのに動いてるのか？

どうやって獲物を探知してるのか？

どうしてゾンビになるのか？

日本人はタダでさえ手品の種を知りたがる人種である。

ゾンビのちぎれた腕を何とか外して窓からまだ残った片方の手を伸ばしてるゾンビに投げ返してやった！

車に戻ろうとすると外から何か音が聞こえて来た。

《チャカッ！チャカッ！チャカッ！》

「おやつ？」

遠くから音がするので音のする方向を見ると電信柱の向こう側から赤黒い何かがかっちに走って来た！

「何だ？何か嫌な予感がするよ？」

だんだんそれが近くまで来た時その赤黒い正体が見えて来た。

俺は戦慄が走った。

それは血まみれのチワワだった。



ハッハッハッ！

血まみれチワワは口から涎を大量に垂らしながら俺に一直線に向かつて来た！

ハガァー！

チワワが俺を見ている…

そしてチワワが口を開けて俺に飛びかかって来た！

どーする？…

「蹴つとばす！」

俺はとっさにチワワを右足でサッカーボールの如く思い切りシユートした！

《ズバァーン！》

ハキヤァーン！

カウンターの効果もありチワワゾンビはクルクル飛んで行き、そのまま思い切り壁にぶつかりと壁の下にある鉄でできた大きなゴミ箱にストーンと落ちた！

そしてその衝撃でゴミ箱の鉄製の重そうなフタがバターンとしまつた！

まだ中でキャンキャンわめいていたが小さなチワワじゃ出て来れない

と思う。

「犬までゾンビになるのか!?!?!映画によっては人間しかゾンビにならない設定もあるのに!?!?!現実世界じゃく平等らしいな。厳しいね……」

下がる生存率。

LV9【ア フル!?!】(後書き)

ちなみにLVとはLEVEL<sup>レベル</sup>の事です。

何のレベルかは…

LV10【酒オーダー】（前書き）

日本酒、バーボン、ビールにあぶさん、焼酎、どぶろく、テキーラ  
何でも来い！

酒持って来い！

## LV10【酒オーダー】

動物もゾンビ化すると言う事実にはげんなりしながらも俺は車にたどり着いた。

車を見るとバンパーがひしゃげて右側のヘッドライトが割れていた。さつきゾンビを跳ねた時に損傷したのだろう。

これではやたらゾンビを跳ね飛ばす訳にもいかんな…

結構爽快だったけどな。

俺は車に乗り住宅街を運転しながら携帯で彼女のモニカに電話した。俺「もしもしモニカ？今どこ？こっちはゾンビのせいでうんこ漏らしちゃったよ！先にアパート帰ってて！籠城するから！俺は水と食料を取って来るよ！…え？…それより酒？…バカヤロー！荷物は持てる量に限りがあるから食料優先だ！酒と食料どっちが大切なんだ！？…え？…酒？…バカヤロー！…え？…じゃあ自分で取って来る？…バカヤロー！命と酒どっちが大切なんだ！？…え？…酒？…バカヤロー！いーからアパートで待つとけ！」

電話を切ってカーラジオを聞くとニュースがやってる。

ラジオ「…人間が人間を喰い殺すと言うには信じられない事件から丸2日、犠牲者は増える一方で、感染者に襲われた犠牲者は感染者になりネズミ算的に増え続け感染者は増大の一途を辿っています。この惨事に出動要請を受けた県内、県外の自衛隊と沖繩在住

のアメリカ軍が一致団結し、暴徒化した感染者を鎮圧する為に乗り出したとの事。この異常な事態に全隊員に銃火器の使用許可がおりてる模様です。」

とうとう軍が動いたか…

大事になって来やがったな。

動物のゾンビは俊敏さも損なわれて無いし厄介だろうが人間ベースのゾンビならトロイし数で押されない限りは軍が負ける事は無いだろう…

動物ゾンビのせいで難易度があがっちゃったけど、唯一の救いはゾンビが昔ながらの歩くタイプだって事だな。

やっぱり今時のゾンビ映画みたいに走っちゃいかんよ！

それにしても暑い！

窓開けよ。

…ん？…

窓を開けると運転席のサイドミラーに後ろから誰か男の人が走って来るのが見えた。

…動物ゾンビに追われてるのかもしれん！

俺は速度を落とし窓から後ろから近づいて来る人に声をかけた。

俺「大丈夫ですか！？もし良かったら乗ってください！」

スピードを緩めて車を止めると全速力で走りながらだんだん近づいて来る男は血だらけで、顔の骨が見えてて、腹の辺りからはみ出てる腸が走ってる勢いで上下左右に激しくブラブラ揺れてるのが見えた。

俺「ゆくし（嘘）だろ？…だって走ってるよ？…」

LV10【酒オーダー】（後書き）

二日酔いが怖くて酒が飲めるかー！！

それなら産婦人科で宴会しようかー！？

（このサイトにこの歌詞が分かる人いるかな？…いねーだろうな  
）W）



LV11【疾走系】（前書き）

止まらなければ良かった…

LV11【疾走系】

俺は急いで運転席の窓を閉め始めた！

《ウィーン…ガシツ！》

しかしもう少しで閉まると言う所でゾンビの片手が窓に入ってきてゾンビの手が窓に挟まった！

「うがぁー！！」

その為に俺は自分の頭を左側の助手席の方に傾けたまま住宅街の路地裏を運転せざるを得なかった！

車を走らすとゾンビも窓に手を挟んだまま欽ちゃん走りのようにテケテケとついて来た！

「ぐええー！！」

「こいつ…心配してやったのに喰おうとしやがって…おや？」

道路の右側に電信柱が見えた。

「この道を行けばどうなる事か！行けば分かるさー！ありがとうー」

俺は顎をしゃくらせながらそう言い放つと車を右側に寄せて一気に車を加速させた！！

「ふう？？」

《ドッカーアン！！》

《ぐっちゃあ！！》

《バリーン！！》

電信柱におもつくそ直撃したゾンビは壁や地面に血肉を撒き散らして瞬時に肉塊へと化した！

しかしその衝撃で運転席の窓ガラスが割れてしまった…

「オーマイガー！！これからは車も安全とは言えんな…」

生身で外を歩くのと車で外を走るのでは恐怖度が全然違う。

そして今まさに車の安全神話が崩れたのだ…

まあそれでも徒歩で歩くよりは大分マシだが。

…それにしても疾走系がいるとは…

走るチートゾンビは一見人間が逃げてるようにも見えるし紛らわしい。

…

それにしても疾走系がいるとは…

走るチートゾンビは一見人間が逃げてるようにも見えるし紛らわしい。

…まあどこまで持つかは分らんがやれる所まではやってみよう。  
スーパーかコンビニを目指して車を国道線に出すと朝より車が横転してたり死体の数が増えていた。

その間をやたら飛ばして逃げる車が何台か走り去った。

何体かのゾンビが歩いててその内の1体が走って人間を追いかけた。

「うがああー!!」

「ぎゃあー!!」

さらに車から引きずり出されてゾンビの餌食になってる人達もいた。

「ぎゃあああー!!」

…通り過ぎる。

するとまた襲われてる女性が見えて腕に噛みつかれながらも俺を見るやこう叫んだ。

女「助けてー!!」

…通り過ぎる。

最寄りのスーパーが見えたが、ゾンビの数が多かったので通り過ぎる。

すると水や食料を抱えて走る男が見えた。

男「ぜはあー！ぜはあー！」

その男は走ってたが…

《ぐしゃあー！》

前から来た別の男に横からバットで頭をフルスイングされて頭が潰れてしまった。

さらにその男がバットで殺した男から水や食料を奪って走り出すと…

《パァン！》

前から警官が歩いて来ていきなり銃を発砲した。

男は脳みそを路上にぶちまけて死んだ。

なーんだ…

これは生き残りをかけたサバイバルゲームだったのか。

俺は警官に向かってアクセルをベタ踏みした。

**LV11【疾走系】（後書き）**

走る系は反則だよな（ー）

まあそれ言ったらバッテリーやデモンズなんか無理ゲー並みの反則  
度だけどなWWW

LV12【自由】(前書き)

まあ、物資調達は必要ですからね。

## LV12【自由】

お巡りが口笛を吹きながら射殺した男の食料に手をかけた。

そして俺は車を加速させてお巡りに突っ込んだ！！

「えっ？」って顔で俺の方を見たがまさか車が突っ込んで来るとは思わなかったのだろう。

《ドツカーン！！》

拳銃を身構える間も無くお巡りは回転しながら道路に吹っ飛んでいった！

さっきのがゾンビサイクロンなら今のはお巡りサイクロンか？

…などと中2病的な事を考えていると地面に手錠が2錠と、拳銃が2丁落ちていた！

俺は周りに誰もいないか用心深く確認しながら車を降りて戦利品を回収する事にした。

食料の方は水のペットボトルが1つにあとはカニの缶詰めと豆缶とツナ缶がそれぞれ2缶づつにホットドッグとサンドイッチが1個づつ後は缶コーヒー1本に煙草が1箱あった。

少ないな…これだけの食料で殺し合いをする世の中になるんだなあ。



俺は朝から何も食べずに動きまわったおかげですっかり腹ペコだったのでホットドッグとサンドイッチはその場でたらいらげ水で流しこんだ。

俺は禁煙中だったので煙草を吸うか迷ったが、コーヒーと一緒に吸う事にした！

「スパー！」

久しぶりの煙草は美味くクラツとした。

まさに甘美な毒と言えよう。

もう値上がりなんか気にせんでも良い。

…どうせいつまで生きられるか分からんし。

煙草をくわえてワツパを拾う。

敵を拘束したりいろいろ使えるかも知れないので2錠とも頂く。

2丁拳銃の方は【ニューナンプ】と言う日本警察の標準装備の回転式拳銃だ。

弾を確認すると片方に2発、片方は4発入ってた。

…6発か…少な〜な。

2丁もあるって事は同僚の警官から殺して奪ったに違いない…

悪いお巡りさんだ！

俺は回収した物を車に乗せて再び車を走らせた。

するとさつき跳ね飛ばした警官が道路に転がって、血まみれで足があらぬ方向に曲がりながらもまだピクピクして俺の車に手をむけて恨めしそうな顔してた。

なので俺は『グシャア！！』と車で顔を踏み潰してやった。

サイドミラーで確認すると潰れたトマトのような顔から血が『ドビユ！ドビユ！』と溢れ出していた。

腐った国家権力を俺のポロ車でひいたり、食べ物や銃まで簡単に手に入るなんて…

これは【自由】だ！

「自由ばんざーい！」

思わずそう叫んだ。

LV12【自由】(後書き)

ご意見、感想お待ちしております。(^| ^)(^| ^)v

LV13【たかゆき】(前書き)

やっとこそ仲間が登場だ！

LV13【たかゆき】

自由と拳銃を手に入れた俺は意気揚々と家路に向かった。

もうすぐ俺のアパートにつく。

帰る途中で【子供の国】と言う動物園がある。

子供の国を過ぎた所にコンビニがあるのでそこでもっと食料を調達しよう！

…子供の国が見えて来た。

その時俺は信じられないものを見た！

？「ウツキー！」

なんと！

動物園の門の前でスーツを着た【チンパンジー】が親指を立ててヒツチハイクしてるではないか！

俺はチンパンの前に車を横付けした！

チンパンはアタツシユケースを持っていた。

チンパン「ウツキー！ウキキ！」

俺「何？僕は本土からはるばる子供の国で行われるチンパンショー

のイベントの為にやって来たとても賢いチンパンだ。TV局のスタッフ同伴で沖縄まで来たのだが、熊やライオンなどの動物及び飼育係やスタッフ全員がゾンビになってしまっただけで命からがら脱出して来たんだ！…だって？」

チンパン「ウツキウツキ！」

俺「何？生存率をあげる為に事態が落ち着くまで行動を共にしないか？僕は賢いし、運動神経もあるし、武器だってサイズがあれば何でも使える！ゾンビにだって負けやしないし君の力になれる！…だって？」

確かに賢いチンパンだ！

何故か俺は彼の言いたい事が分かった！

俺「よし！乗りなチンパン！そのコンビニで酒を取るぞ！」

チンパン「ウツキー！」

俺とチンパンはコンビニに入り食料とビールを取り手際良く車に載せた！

その時店員のゾンビが襲って来た！

ふうああ〜

俺「さあチンパンのお手並み拝見といこうか？」

その時チンパンは胸ポケットから【パチンコ】を取り出した！

分厚いゴムのパチンコにパチンコ玉をセットして勢いよく伸ばすとゾンビの眉間にぶち当てた！

《パチーン！》

パチンコ玉は店員ゾンビの眉間を貫通して脳みそをぶちまけた！

俺「スッゴい威力だ！チンパンの強い握力が成せる技だな！だけど俺達まるで強盗みたいだな！」

チンパンは得意そうな顔で車に乗るとビールを飲みながらタバコを吸い始めた。

俺「何だお前？イケる口だな！そう言えばまだお前の名前まだ聞いて無かったな！何て名前なんだ？」

チンパンは胸ポケットから名刺をサッと取り出し俺に渡した。

名刺にはひらがなで

【たかゆき】

…と書かれていた。

**LV13【たかゆき】(後書き)**

最初の仲間がチンパンとは…

面白くなりそうだ) ^ O ^ (^



LV14【発砲銃】（前書き）

やっと自宅のアパートに着きました。

## LV14【発砲銃】

俺が住んでるアパートに到着した。

車を車庫に入れるとたかゆきが喋った。

たかゆき「ウキキ〜？（君が持つてるのは回転式拳銃かね？）」

俺「そうだ。銃は2丁あって片方は2発、もう片方は4発弾が入ってる。」

たかゆき「ウキキ…（少ないな…できれば2〜3発ぐらいは残してくれないかね？）」

俺「何故？」

たかゆき「ウキキ！ウキツ！（自決用に使いたいのだ！僕は森の賢者と言われてるチンパンの中でも稀にみるエリート中の超エリートだ！あんな醜くて脳みそまで腐った理性のカケラも無くよだれをたらして本能丸出しのバカで下品なゾンビにはなりたくないのだよ！ジエントルメンな僕はスマートで尊厳ある死を迎えたいのだよ！だから僕にゾンビ化症状が現れたら君がその拳銃で僕を撃ってくれたまえ！高尚なチンパンのまま死なせてくれたまえ！）」

俺「…分かった。」

チンパンの分際でプライドの高いやつちやな〜と俺は思った。

車を降りて車庫から外に出ると早速死体が2体あった。

まずは犬の死体。

内臓がぶちまけられて横たわってる…

この犬はたまにゴミ袋を食い破ってゴミを散らかしてる近所迷惑な雑種犬だ。

今は自分が喰い散らかされてた。

次の死体は妙だった…

あお向けに地面に転がった人間（顔が腕で隠れてよく見えないが女性？）の死体の上に何やら文字が書かれた大きな白い紙が被せられていて、紙の真ん中から長めの刃物で刺されてており、刃物で胴体の腹の辺りに固定されていた。

文字は全て英語で書かれおり、一番下の方に大きく【Z】とまるでZを強調するかのように書かれていた。

意味は分からない。

俺「近所に住んでるアメリカ人がやったのかや？タダでさえゾンビホラーでいっぱいなのはこの上サスペンスの要素とかいらんよや〜。」

ふっつえ〜

一同「!?!」

その時、口が奥歯の方まで裂かれて口周辺の肉がエグられて奥歯モロ出しのグロゾンビが現れた！

「があああ〜」

俺「うわっ！？鉛玉でも喰らえ！！」

俺はニューナンプ（4発の方）を取り出しゾンビの頭に向けた！

たかゆき「ウキキ〜（あっ！むやみに撃ったらダメだ！音で他のゾンビが…）」

《パァン！》

近くまで引き寄せ発砲！

手に軽い衝撃が伝わり、乾いた安っぽい銃音が響いた！

LV14【発砲銃】（後書き）

この小説…

自分で読んでみすぐ面白いです…！

LV15【帰宅】（前書き）

拳銃ぐらいなら一般人でもすぐ撃てるかな？

さすがにショットガンとかはとてもしゃないけど無理かもね。

## LV15【帰宅】

《パァン！》

俺は拳銃を口裂けゾンビに向かって撃った！

だが外れてゾンビの左耳をかすめただけだった。

俺「あれ？当たらんな？もう1発。」

たかゆき「ウツキー！（ダメだー！）」

《パァン！》

今度は眉間に命中してゾンビが倒れた！

俺「どうだ！ゾンビを銃でやっつけたぞ！」

たかゆき「ウキー！（こんな音が響きやすい所でむやみに撃っちゃダメじゃないか！ゾンビは音による性質があるらしいからな！あんなトロいゾンビ1匹なら逃げるかその腰にあるハンマーとかでやっつけなきゃ！しかも1発外してるし！弾だって少ないのに！）」

俺「せつかくやっつけたのにブーブーうるせーなこのチンパンは！…ん？やべー！ゾンビが何匹かこっちに来る！」

銃声と俺達のやりとりを聞きつけたのかワラワラとゾンビ共がやって来た！

たかゆき「キキ！（言い争ってる暇は無い！君の部屋に逃げるぞ！）」

俺達は俺が住んでるアパートの3階目指して走った！アパートの下にかけつけ階段を登る！

動きが遅いゾンビ共は何とか切り離れたがその中に何匹か疾走系ゾンビが混じっていた！

俺達が階段を登るとゾンビも走って追って来た！2匹はいる！

俺「やべーぞ！追いつかれる！よし拳銃で…」

たかゆき「ウキ！（銃はよしたまえ。モグモグ）」

何とたかゆきは【バナナ】を食べてるではないか！

俺「おい！こんな時におやつを食べてる場合か！」

するとたかゆきは階段を登った所にバナナの皮をおいた！

ゾンビ達が走って来る！そして…

《スツテンコロリ〜ン！》

バナナの皮を踏んだゾンビ共はスト2のガイルの如く勢いよく一回転すると長い階段をゴロゴロ落ちて2匹は思いきり頭を強打した！

打ち所が悪く2匹の疾走系ゾンビは脳みそをバラまいて死んだ。



俺「なっ！？バナナ1本で殺っちまった！」

たかゆき「ウッキー！（これは僕の特技の1つ【ブービートラップ】さ！）」

俺「ブービー…なるほど！チンパンだけにね！」

そんなやり取りをして3階に来た俺達は俺の部屋の302号室にたどり着いた！

ここまで来るのには半日もかかって無いが、何ヶ月もかかったような気がする…

もう疲労困ぱいだった。

しかしここまで来ればもう安心だ！

頼もしい相棒もできた事だし

やーかい（帰宅）

…+

しかしD吾は気づいてなかった。

実は先ほどから彼らを監視してる怪しい人間がいる事に…

LV15【帰宅】（後書き）

第1部

仕事場から「やーかい」（帰宅）編、終了。

「セーブしますか？」

【はい】      いいえ

**LV16【監視員】（前書き）**

**第2部【仲間と合流編】スタート！**

**D 吾達に迫る怪しい影…**

LV16【監視員】

…十…

D吾達がアパートに来てから部屋に戻るまでの一部始終を黒塗りのワゴン車から双眼鏡で覗いてる黒いサングラスをかけた2人組の男女がいた。

英語で喋ってる事からアメリカ人らしい。

女「やっと戻ったな被験者、山城D吾、」

男「丸刈りに体中に無数の刺青。写真で確認した限り間違いありません。」

女「兄貴の方だな。同じく【ZW】を飲んだ長髪の弟の、山城まさる、もこの付近に住んでるんだろ？」

男「はい。我が班の工作人員の情報によると自宅待機してるようです。しかし弟の妻は感染してるようですね。」

女「妻の方はどうでも良い。肝心なのは兄弟が感染してるかどうかだ。妻はゾンビ化してるのか？」

男「現在は分かりません…しかし近所なので兄と連絡して合流する可能性がありますね。」

女「固まっていた方が都合が良い。バラバラだと全てを監視できん。この兄弟は被験者の中でもかなり【当たり】っぽい有力候補だ。こ

の兄弟の件は我々のヤマだ。我々が手柄を取るんだ。他の奴らに取られてたまるか。」

女は拳銃を取り出して言った。

女「他の班の監視員に横取りされそうになったら隙を見て殺せ。監視カメラには写らないようにしろよ。」

男「…分かりました。所で派遣された自衛隊や特殊部隊の連中ですが…」

女「皆死ぬ予定なんだろう？上層部から聞いたよ。」

男「知ってたんですか！？日本の自衛隊はともかく特殊部隊にはあなたが手塩をかけて育てあげた部下達も大勢いるんですよ！？」

女「どうでも良い。私が興味あるのは金と武力と権力と美と快樂だけだ。何人死のうが知るか。」

男「…貴女がそういう人だったのは知ってましたが本当に冷酷な人ですね。…仮に私がそうなくても平気なんですか？」

女「当然だ。そうならんように気をつける。」

女は吐き捨てるように言った。

事実女にとってはどうでも良かった。

女「第一あの【ジャイアント】も投入されるなら誰が相手でも勝ち目は無い。何しろ戦車だって壊す化け物だからな。イラクに極秘投

入された件ならお前も知ってるはずだ。それにたくさんの各種の進化系ゾンビが軍隊派遣に合わせてこの島でバラまかれるんだろ？実戦データを山ほど取るために。」

男「…はい。おや？」

男は双眼鏡を覗きながらいった。その先には【Z】と書かれた紙が貼られた死体がピクピク動いているのが見えた。

男「ジャスト20分！【デビル】覚醒です！」

**LV16【監視員】（後書き）**

彼らは何者なのか!?

そして【デビル】とは!?

LV17【デビル】(前書き)

凶悪な進化系ゾンビ

【デビル】登場！



## LV17【デビル】

…  
…

地面に倒れてた女の死体がムツクリ起き上がった。

その外見は普通のゾンビとは違っていた。

まず顔を含めた体全体の色が赤黒く変色し、無数の血管がいびつに浮き出していた。

目は赤くららんと輝き、口は犬のように裂けて広がっており、口の中には黄色く変色した汚い牙がズラツと並び、人間の頃と比べ一段と鋭利さを増していた。

そして爪は10センチ程の長さでまるでナイフのように鋭くなっていた。

その時化け物の背中の方が蠢き、何かが盛り上がって来た！

《ゴキベキゴキ！》

ひピギアアア！

ビリビリとTシャツを突き破って出て来たのは何と2本の長い腕だった！

長く赤黒い腕は頭の位置を超えた所で折れ曲がり、まるで悪魔の翼のような形状になった。

「フシユルルル…」

化け物は変態すると満足そうに歯をガチガチと鳴らしてカクカクと妙な動きをした。

不気味で意味不明な動きだった。

遠くからこの様子を監視員達が見ている。

女「あれが【デビルゾンビ】か。醜悪な化け物だな。」

男「通称デビルと呼ばれてます。」

女「何か気持ち悪い動きをしているぞ？あれは何の意味がある？」

男「どうしてあんな不気味な動きをするのかはまだ研究員の間でも詳しい事は分かっておらず、掛け合わせたDNAによるものではないかとも言われてますが…」

女「何を掛け合わせた？」

男「カマキリとゴキブリです。」

女「…派生の見込みはあるのか？」

男「研究中です。」

女「おい。デビルが地面の匂いを嗅いでるぞ？」

男「デビルは通常のゾンビより視覚、聴覚などの感覚器官が遥かに

向上しています。特に嗅覚は犬並みです。」

女「計算ではD吾を追って3階まで登る予定だな？」

男「はい…だけどあいつなかなか行かないな？…まさかこっちに來るって事は…」

男は少し焦った。

しかし女は笑った。

女「それはマヌケだな。大体何の為に私がいると思ってるんだ。」

女は手の指をゴキリと鳴らした。

しかしデビルはアパートの方を見ると素早く走り出し、ピヨンと3メートルはジャンプすると壁にひっついてそのままヤモリのように壁をよじ登った。

男はホツとした。

男「爪の構造により壁を這う能力と従来のゾンビには無かった跳躍力を獲得しています。」

男は運転席と助手席の間にあるモニターのスイッチを入れた。

モニターにはアパートの壁ををよじ登ってるかのような映像が写し出された。

LV17【デビル】（後書き）

中ボスぐらいかな？

LV18【シッコリ】(前書き)

お久しぶりーふです。

今回から1話1話の尺を長めにして書いてます。

話が進むのが遅いからです。

ちなみにダガー(十)はD吾以外の地の語りです。

説明書き忘れてました。

「V18」ジミ「!!!」

…+…

アパートの壁をよじ登るデビルの服には小型の高性能カメラがついていた。

男「よし！このまま3階のD吾達がいる302号室まで行け！」

デビルがこちら側に向かって来なかった事に男は心底ホツとしていた。

女「研究所にもこのデビルはいたんだろ？餌は何をやっていたんだ？」

男「鳥や豚の肉をあげてましたね。けどやはり人間の肉を好むようです。」

女「餌は生きたまま放り込んだのか？」

男「いえ。既に死んだ動物や人間の肉です。」

女「なんだつまらん。…じゃあ生きた餌を補食するのを見るのはこれが初めてか？」

男「そうですね。檻の中では見られないデビルの性質や実戦データの回収も兼ねての事ですので…」

ぐわぶ…ぐわぶ…

モニターからデビルゾンビのくぐもった声が聞こえて来た。

女「ククク…この仕事は面倒な事も多いがこういう楽しみもあるからな。早く悪魔が起こす殺人現場を見てみたいぜ。」

男「楽しみなんですか？俺は今日この仕事を考えて夜も寝れなかったし、今朝も胃が痛くて胃薬を飲んで来ましたよ。あなたは本当にヒドい人ですね。罪も無い人達を実験台にするのに楽しいなんて残酷過ぎる…」

その時、女がいきなり男の胸ぐらをつかみ拳銃を鼻の穴に押し入れた！

男「ぐわあ！？何を！？」

女「おい、へたれ野郎。まさかこの仕事を抜けたいとかほざくんじやないだろうな？」

女は声のトーンを落とし、冷たい声色で男に言った。

女は黒いパイロットサングラスをかけてるので表情が見えなかった。

男「いつ…いえ！そんなつもりは…！ただ俺は可哀想だと思っただけで…！」

銃を突きつけられて男は恐怖した。

何故なら女はパートナーでもためらう事無く引き金を引ける事を男は知っているのだ。

この女の非情っぷりは同僚の間でも有名だった。

女『いちいちベソかいてんじゃねえよ。お前は黙って自分の仕事してれば良いんだ。今度弱音を吐いたらお前のヤワな脳みそを吹き飛ばして本部に連絡し、もっと骨のある研究員をよこしてもらおう。私という時は発言にも細心の注意を払え。良いな？2度は言わんぞ。』

女はゆっくり銃を下ろしてメンソールの煙草に火をつけた。

男は震えながらも再び安堵した。

あまりの恐怖と緊張の連続で脇汗が凄い事になっていた。

男（…くっそ！マジビビったぜ！この糞アマ！今日は既に本命の仕事やる前からこのザマだ。これじゃ命がいくつあっても足りねえ！現場は日本の言葉で3Kだと言うのが本当だぜ！）

ちなみに3Kとは【キツイ】【汚い】【危険】と言う意味である。

男はもう現場には回らず給料が安くてずっと退屈な事務仕事に回してもらおうと本気で思った。

男は改めてこの女と組ませた上役を恨んだ。

ちなみに男はアメリカから来た巨大な闇組織の研究員で短髪の黒人。

女は白人でアメリカの特殊部隊デルタに属しながら闇組織の特殊工作員でもあった。



女の容姿は金髪碧眼で黒いパイロットサンングラスに黒い戦闘服を身にまとっていた。

長い金髪は後ろで結んで邪魔にならないように束ねてある。

女はゾンビなどから男を守る戦闘員であると同時に男が裏切る場合を懸念しての監視員や処刑人としての役割も持っている。

女は元々アメリカ合衆国の特殊部隊隊長と言う立場で今回の沖縄ゾンビ事件で沖縄に派遣された。

しかし女はとある闇組織の作業員であり、自分の部下や一般人を手くゾンビのもとへ誘導して実戦データを得たり、重要人物（政治関係者）などの拉致、沖縄ゾンビバザードで突然変異で発生するケースがあるイレギュラーの特殊ゾンビなどの監視、または血液サンプルの回収、（この任務はかなり危険なので非力な研究員では無理）などの任務を闇組織から承っていた。

組織から複数の任務を与えられていて立場は研究員の男より上なので男にいろいろ命令するだけの権力も持っていた。

男（そうだ！俺も銃を持ってるんだし、いざとなったら隙を見てこの女を撃つちまえば…！）

女「念のため言っとくが妙な真似をするなよ？お前が銃を構える間に私はお前の眉間に銃弾を3発は叩き込む。私の不意をつけると思ふな。私の勘や運動神経、即ち戦闘力は並の軍人を遙かに凌駕する。お前が少しでも妙な素振りを見せたら殺す。これは脅しじゃないぞ。

□

男『は…はい…間違ってもそんな事はしません。』

全てを見透かしてるようで一部の隙も無くあくまでも冷静な女の隙をつくのは不可能に近かった。

それに男は同僚から聞いた女のあだ名を思い出していた。

女のあだ名は【戦場の死神】である。

男に勝ち目は無かった。

その時モニターを見るとデビルが3階にたどり着いてドアの前に立っていた。

ぐぐぶうう…！

男『デビルが目標地点に到着しました！』

キシャアアアー！！

デビルゾンビは4本の腕でドアをバンバン叩いた！

鉄製のドアはミシミシ音を立てていた！

女『ようし！やっと退屈せずに済みそうだな！』

男『デビルの力なら鉄製のドアも壊すと思います！』

その時ドアに書かれた番号が見えた。

∴ ドアには【301】と書かれていた。

女『301∴隣の部屋じゃねえかバツカ野郎!!』

《バツカアーン!!》

男『ぶべらっ!!』

女は男の顔に思い切り強烈な鉄拳を叩き込んだ。

LV18【ツッコミ】（後書き）

体調悪いのと仕事が忙しかったので大分書くのが遅れてしまいました。

まだちょっと万全では無いし、久しぶりに書いたので誤字脱字があった場合は見逃してちょW

あと久しぶりに書いたのに今回もこいつらの会話だけで終わってると言う件W

「LV19【悪魔のいけこえ】（前書き）」

いろいろあって小説書くどころじゃなかったです（＾－＾・）

今回は1回レベルの恐ろしさを見せようと言っただけです。

## LV19【悪魔のいけにえ】

…十…

《バアン！バアン！バアン！》

デビルゾンビがドアを猛烈な勢いで叩いていた。

「ぐぎやるがあああー！！」

デビルと呼ばれた元は若い女性だった彼女は1度死んでアパートの下の路上でゾンビの進化系として復活を遂げた。

彼女は生前の記憶を失っていた。

しばらく眠っていたような感じだった。

気がつけば見慣れぬ土地で何かうまそうな匂いのする匂いをたどってアパートの壁を登り3階のドアを叩いていた。

夢の中で誰かが命令していたようだった。

誰かを追わねばならないような気がした。

だが誰を追うのか思い出せなかった。

彼女にはおそらくこれがドアと言う物だとは分かっているはずだったが、何故かここから入るのが正しいような気がしたのだ。

彼女がまず最初に自覚した感覚は空腹だった。

次に強い破壊衝動だった。

とにかく何かを壊したい。

今はその感覚だけに支配されていた。

めちゃくちゃに暴れ狂ったら自分の中にある満たされ無い何かを埋まるような気がした。

…その様子を監視員の男と女がモニターで見ている。

女『何がデビルだ。大層な名前をつけやがって。知能もゴキブリ並みだなあジェフ？』

ジェフ『スミマセン。ミザリー大佐』

ちなみに白人の女の名前は【ミザリー・チェーンバース】

黒人の男は【ジェフリー・ローガン】と言う名前で、仲間からはジェフと略される事が多い。

ジェフは殴られた頬をさすりながら首を傾げた。

ミザリー『ちなみに今回の作戦名は何だっけ？』

ジェフ『あ…悪魔のいけにえです』

ミザリーはちよっと笑った。

ミザリー『本当にロブ博士はホラー映画が好きだなあ。まあ私もホラーと言うかスプラッターやスラッシュャー映画などは好きだがな。実にユニークな作戦名をつけるなあ博士は…』

その時だった！！

《バァーン！！》

『きゃあー！！』

『うわあー！？』

デビルが301号室のドアを破壊した！

中から女と男の悲鳴が聞こえた！！

ジェフ『今現在デビルが301号室に侵入しました！』

ジェフが録音装置の小さなマイクにむかって叫んだ。

ジェフに緊張が走る。

ミザリー『いよいよスプラッターショーの始まりか…フッフ』

ミザリーは煙草の煙を吐きながら邪悪な笑みを浮かべた。

モニターにはゴルフクラブを持った40代後半ぐらいの男性と女性が映っていた。

ジェフ『おそらく彼らは夫婦と思われれます！』



夫婦『ひっ…ひい!?!』

男女夫婦は恐怖におののいた。

何しろ目の前にいるのはドアを破壊した醜悪な化け物だった。

化け物の外見は二足歩行の全体的なフォルムこそ人間だが、背中から生えた2本の長い腕やその禍々しい顔は明らかに人間では無かった。

化け物は夫婦をじっと見ながらじりじりと2人に近づいて来た。

中年の亭主はおびえた顔をしていたが、ゴルフクラブを縦に構えてデビルに勇敢に向かって行った!

亭主『うりゃあー!?!』

亭主がゴルフクラブをデビルの頭上に打ち下ろす!

《ガシッ!》

亭主『えっ!?!』

デビルは背中に生えてた左腕であっさりゴルフクラブをつかまえた。

《ズバアッ!》

亭主『熱っ?...ぎゃあ!?!腕がああー!?!』

気づいた時には亭主の両腕は切断されていた。

ミザリー『ほう？バカなりにやるな。あの動きは一般人じゃ対処できまい。』

デビルが背中から生えた両腕で亭主の肩をガツシリ掴む。

するとデビルの口が変形して前面に盛りだして来た。

《ベキベキベキ！》

ゝぎゃるゝぶぶ…！ゝ

変形したその口の形状はまるでカマキリやゴキブリの口のようにだった。

亭主『ひい！？よし子ー！！今のうちに絵美を連れて逃げろー！！俺はもうダメだー！！』

妻『あんたー！！』

デビルはよほど腹が減ってたのだろう。

亭主の肩を背中中の両腕で掴んで自分の顔の位置まで持ち上げると通常の位置にある残りの両腕で亭主の腹をガバツと割き、顔を腹におもむろに突っ込んだ！！

ゝぐわぶるるる…！！ゝ

《ぐちゃぐちゃびちゃあ！！》

デビルはダイレクトに腹に顔を突っ込んだまま物凄い勢いで亭主の

内臓や腹の肉を喰い始めた！

亭主『がはあ！？…「ごぶふ…！！！」』

亭主は口から血を垂らし激しくブルブルと痙攣していたがすぐに息絶えた。

妻『いやあー！？あんたー！！！』

《ぐちやるぶちゅぐちゅ！！》

デビルが亭主の腹から大腸をくわえて引きずり出した。

妻が泣き叫びながら玄関に向かって逃げ出した。

しかしそれを見逃すデビルでは無い。

妻が玄関の近くまで来た時にはデビルは一気に飛んで妻との間合いを詰め、かがんだ体制で着地したと同時に妻の両足を瞬時に切断していた！

妻『きゃああー！！！』

ハガチガチガチガチガチ！

両足を切断されて地面に倒れた妻が上を見上げるとデビルが口をガチガチ鳴らしながら妻を見下ろしていた。

妻『ひい！？い…いや…死にたくない…！』

妻はあまりの痛みと恐怖で泣きながら狼狽したが両足を切られては  
どうする事もできない。

奇しくも恐怖による震えでデビルと同じく歯をガチガチさせるだけ  
だった。

妻『死にたくない死にたくない死にたくない』

ひきしゃあああー！！！！

妻『いやあああ！？』

ここからは一方的な殺戮だった。

《ズバツズバツズバツズバア！！》

妻『がはあ！？ごぶ！ぎゃふ！ぐでぶちゅ！げはあ！』

ひくわるるー！！！！

妻『…絵…美…』

身動きの取れない妻にデビルが腕を一振りする度、血肉や骨が飛び、  
腕が飛び、やがて内臓が飛んだ。

デビルは妻の内臓を引っ張り出して地面にまき散らすと、やがて頭  
をもぎ取り、ぐちゅぐちゅと目玉を爪でほじくり出して食べてしま  
った。

死ぬ間際の亭主によし子と呼ばれていた妻の身体はあつと言つ間に

デビルにバラバラにされてしまった。

301号室は床中がほとんど血の海になっていた。

ジェフ『オーマイガー…』

ジェフはあまりの惨劇にうつむいて頭を抱えた。

ミザリー『汚い食べ方だな。』

ミザリーは平然とした様子で再び煙草に火をつけた。

ジェフはマイクに向かって再び喋った。

ジェフ『うう…現時点でデビルの運動神経、敏捷性、攻撃力はウォーカー、ランナーなど通常のゾンビを遥かに上回る模様。今回の攻撃対象は民間人。ZW被験者の例の兄弟ではありません。』

ミザリー『この時点で実戦値は85はいったんじゃないか？』

ジェフ『ええ…デビルは賢くは無いですが戦闘力はかなり高いです。』

ミザリー『この様子はカメラを通してデータバンクに全て録画されてるんだろ？』

ジェフ『はい。』

ミザリー『これを上手く編集して映画にできないか？博士に頼んだらきつと賛同してくれると思うんだが？』

ジエフ『それマジで言ってるんですか？』

ミザリー『ネットで有料配信したら儲かるぞ。何しろ本物の悪魔による本物のノンフィクションスナッフホラームービーだ。：いや：それともジャンルはドキュメンタリーにした方がアクセス数増えるかな？』

ジエフ『…』

《ガタン！》

その時クローゼットの方から音がした！

ぐわぶ！？！

デビルがクローゼットに近づいてクローゼットの前で止まる。

ジエフ『なっ…何だ！？』

デビルはしばらくクローゼットの匂いを嗅いでたが何かに気づいた！

ぎゃるるー！！

デビルが腕を振り下ろし、クローゼットを破壊した！

すると中から『きゃあぁー』と言う叫び声が聞こえ、小さな何か  
デビルの股下を駆け抜けて行った！

女の子『パパー！ママー！』

女の子は泣きながら玄関に走って行った！

「きしゃあー！ー！」

デビルが振り向き、よだれを垂らしながら女の子を追う！

「ジェフ『ジーザース！ー！』」

「ミザリー『ハツハツハ！本日のメインディッシュは子羊の活け作りで決まりだな！ー！』」

LV19【悪魔のいけにえ】（後書き）

ゾンビばかり気を取られてアメリカ人の男女の名前なかなか思い  
つきませんでしたWW



LV20【302号室】(前書き)

監視員、デビル側からD吾達の視点に戻ります。

LV20【302号室】

デビルがクローゼットを壊すと死ぬ間際の親に絵美と呼ばれた女の子が悲鳴をあげながらクローゼットの中から出て来てデビルの股ぐらをぐり抜けて一目散に走って行った！

絵美『きゃあー！！』

ジェフ『オーウ！絵美ちゃん逃げ切ってくれー！』

ミザリー『まだ5歳くらいか？体が小さくてデビルの攻撃が当たらなかつたのか…』

絵美は走りながら横目で両親の死体をチラッと見たが、死体は原形を留めていなくまさに【散らばった肉】と言った感じで地面に散乱していた。

ひきしゃああー！

絵美『えーん！ママー！！パパー！！』

デビルが血だらけの床を駆け抜けた！

デビルは人間の頃の名残で靴を履いていたのだが、靴からは赤黒い足の指と鋭い爪が靴を突き破って外に飛び出していた。

足の爪は滑り止めや壁を登ったりする役割を持っていて、ノーマルゾンビがより確実に獲物を追い詰める為に進化した賜物である。

ジェフ『ヤバい！追いつかれる！！』

ミザリー『行けー！！ブチ殺せー！！』

絵美『いやー！！来ないでー！！』

ハがああー！！！

デビルが死んだ亭主の死体をまたいだ！

その時だった！！

《ガシツ！ビーン！》

ハがあ！？！

デビルが【死んだ亭主の腹からはみ出た大腸】に足の爪を引っ掛けて、その勢いでそのまま近くの大きな食器棚におもいきり突っ込んだのだ！！

《ドンガラガツシャーン！！》

《ぎへえ！！！》

しかもその勢いで食器棚が倒れてデビルは見事なまでに食器棚の下敷きになってしまった！

《ガシャガシャズドーン！！グシャア！！》

「ぎゃあああー！！」

ミザリー『何だそりゃ！？』

デビルの爪が逆に仇となつてしまった。

まさに【本末転倒】だった。

絵美ちゃんはそのまま玄関にたどり着いてちゃっかりアニメキャラの絵柄が書かれた運動靴を履くと玄関を飛び出して【アラレちゃん】のようにビューンとどこかに走り去ってしまった…

実は絵美ちゃんは幼稚園のかけっこで余裕で一位を取ってしまうほど足が早かったのだった。

ジエフ『いやー良かった！女の子だけでも逃げきれて！』

ミザリー『良くねえよ』

ジエフ『えっ？』

ミザリー『え？じゃあねえよハゲ。何だよ？腸でこけるって』

ジエフ『まあ…あの…っ…爪が甘かったのかな？なんちって』

ジェフは片目をつぶりペロツと舌を出した。

ミザリー『私が求めていたのはな。ホラーなんだ。…できの悪いコ  
ントじゃあねえんだよ!』

ミザリーはおもいつきりジェフの顔面に蹴りを入れた!!

《グシャア!!》

ジェフ『はべら!!安全ブーツで…!!』

ジェフは蹴られた勢いでそのまま助手席の窓ガラスからガツシャア  
ーンと顔を出した。

(Side、D吾)

十

(ここからの話しはD吾達が自宅のアパート302号室にたどり着  
いた時点に戻る。デビルが覚醒する前で時間軸は301号室の惨劇  
から30分前ぐらいである)

俺とたかゆき(チンパン)はゾンビ達を撃退しながら酒や食料を持  
ち、やっと自宅の302号室にたどり着いた!

途中で妙な死体があったがゾンビ共の対応に追われて気にはなつた

が調べる暇が無かった。

俺『いやー戻って来ただけでもラッキーと言うべきか？』

たかゆき『ウキキー（そうだな！…うわ！？汚い部屋だな！ブタ小屋よりひどいじゃないか！台所の生ゴミ捨てる場所にウジがウジウジわいてるではないか！』

俺『掃除が苦手で…』

たかゆき『ウッキ〜（まあいい…不衛生な場所だが我慢しよう…君の部屋で酒でも飲んでニユースでも見ようではないか。』

？『酒ー！…』

たかゆき『ウキ！？（何だ！？子豚！？ハムスター！？）』

俺『違うよ！！一緒に住んでる俺の彼女の酒鬼さかきもにかなだよ！！まあ確かに身長小さくて丸顔だけど！』

もにか『お酒ー！酒酒！酒ー！！』

俺『酒酒づるさいよ！とりあえずビール買って来たからこれ飲ん…』

《プシュ！ゴブゴブゴブー！》

もにか『プハー！お酒もつとちよーだい！』

俺『ちよつと俺らの分が無くなるだろーが！』

たかゆき『ウキキ』（アル中の丸顔彼女か…）』

そんなこんなで俺はシャワーを浴びて、ビールを飲み、タバコを吸いながら皆とテレビのニュースを見る事にした。

ニュースでは依然として死体が蘇り人を襲っている事、さらに県外、県内の自衛隊やアメリカのデルタ（特殊部隊）が次次に殺られていると言う事を告げていた。

現場に行ったキャスターやカメラマンがゾンビの餌食になっている壮絶な映像もあり、まさに南国の楽園のはずの沖縄は地獄絵図と化していた。

どうやらこのゾンビ騒動は沖縄だけで起きているらしく、さらに空港や船などはすでに運行できる状態では無く、漁港や那覇空港に駆けつけた人達は次々とゾンビに襲われてゾンビ共がこった返していた。

電話やネットなどは混乱していて朝よりも非常に繋がりにくい状態になっていた。

俺『どうやら現状は混乱を極めているな…やはり下手に出歩くよりは籠城した方が良さそうだな』

もにか『けっ！何がゾンビだバツキヤーロー！…ヒック！』

俺『もにか！そんなに酒飲んだらいざという時に動けなくなるよ！』

もにか『うるへー！もにかにとって酒は気付けなんだ！このうんこ』

たれ！』

俺『なんだと！このくそもに！』

もにか『くそじじー！』

俺『バカもに！』

もにか『ハゲじじー！』

たかゆき『ウキキー！（君たち喧嘩はよしたまえ！おや！？何かニユースに妙な集団が出てるぞ！？）』

ニユースを見ると生放送中のスタジオにマシンガンで武装した黒装束のやつらが10人ぐらい押しかけスタジオをジャックしていた。顔に大きな目のマークが縦に入った不気味なデザインの新黒装束達はマシンガンをスタッフやキャスターに向けてこう言った。

『我々は【死の腕】と言う組織の者である。この放送局及び古来【琉球】と呼ばれたこの島を占拠する。』



LV20【302号室】（後書き）

突如として現れた謎の集団【死の腕】とは!?

次号を待て!!

LV21【死の腕】（前書き）

【死の腕】とはアメリカに実在した闇組織です。

今も存在…

## LV21【死の腕】

たかゆき「ウキキー！（沖縄をジャックするだつて！？何だこの糞カルト共は！？）」

俺「死の腕つて…昔実際にアメリカに存在した闇組織じゃないか！」

たかゆき「ウキ？（闇組織？）」

俺「数十年前にアメリカで300人以上を殺した殺人鬼のヘンリー・ルーカスが在籍していた闇組織だ。主な活動内容は誘拐や殺人、拷問じみた儀式や要人の暗殺、人身売買などだな」

たかゆき「ウツキー！（D吾やけに詳しいいな？）」

俺「俺はB級ホラー小説を書いているからそっち方面も勉強してるんだ！」

そう言うと俺達は再び画面に目を戻した。

ジャックされたTV局は【RTV】（琉球テレビ）と言う局で、黒装束達はニュースの生放送中のスタジオに10人ぐらい拳銃やマシンガンなどで武装して乗りこんで来たようだった。

1人が拳銃を持っていて残りの9人はマシンガンを持っていた。

黒装束達は震える音響スタッフに「我々の音声をしっかりと拾え」と命じて黒装束達の衣服に小型マイクを取り付けさせた。

黒装束達は日本語で喋っていた。

死の腕はアメリカの組織のはずだが…

拳銃をもった黒装束が喋り始めた。

この黒装束は1人だけ右腕に腕章をつけており、自分の事を【ハンド】と名乗った。

ハンド『我々は長い間日の目の当たらない場所で活動してきた組織だ。闇が光を制す時、世界は混沌と破滅に向かう。』

年配の男のアナウンサーが『それはどう言う意味ですか？』と口を挟んだ。

《パァン!》

突然乾いた銃声のような音が聞こえた!

アナウンサー『ギギ…!!』

ハンド『百聞は一見にしかず』

ハンドが拳銃でアナウンサーの心臓を撃ち抜いた!

スタジオは悲鳴で溢れ返ったが黒装束達は放送を止めたら全員殺すと言った。

画面からはヒリヒリするような緊張感がTVを見ている俺達にも伝わるほど満ち溢れていた。

ハンド『今は我々がアナウンサーだ。質疑応答の際は手を上げて我々に許可を持ちいるように。その君、いいね？』

ハンドは女子アナに向かってそう言つと女子アナは泣きながら『はい』と答えた。

ハンドは恐怖の演説を続けた。

ハンド『我々が目指すのは死と暴力がもたらす恐怖による世界征服である。我々はアンダーグラウンドレベルで活動していたが長い年月をかけて徐々に力をつけていき組織を拡大していった。』

黒装束の1人が新聞の見出しを張るボードに沖縄の地図を貼った。

沖縄の地図はほとんどドクロマークが貼られていた。

ハンド『今現在、離れ島を含む沖縄全域で大量発生している活性死者は我々が作りあげた物である。活性死者の感染力は凄まじく、これらを止める事はいかなる優秀な医療機関や軍事力を持ってしても不可能である。また完全に治す方法も存在しない。』

その時黒装束達が射殺したアナウンサーをハンドの目の前の卓上に乗せた。

ハンド『具体的に言えば【ゾンビで世界征服】をするのだ。』

ハンドはいきなり大型のナイフを取り出すと卓上に仰向けに寝かせたアナウンサーのスーツを切り破り更に胸部にナイフを突き立ててその身体を切り裂き始めた！

女子アナが隣で震えている。

さらにハンドは切り裂いた胸部に手をぐちゃぐちゃと突っ込んでずるずると弾痕のついた心臓をえぐり出した！

…俺は知っている。

この心臓をえぐり出すのは死の腕特有の儀式の1つだ。

こいつらは本物だ！

ハンド『まず我々はこの琉球を支配する。サイズのにも気候も、そしてこの封鎖的な環境も各種もろもろの条件全てが我々に取って手頃で都合が良いからだ。』

ハンドはカメラを心臓に寄せるよう支持した。

ハンド『20××年7月3日今日の日付を記念すべき【Zデー】とする！本日を持っていかなる国もこの琉球に支援などの一切の関与を禁ずる！…もし逆らったら…！』

《グシャアツ！！》

ハンドが手に握っていた心臓を握り潰した！！

ハンド『死の腕が世界を握り潰すであろう』

ハンドの手は真っ赤に染まっていた。

ハンド『今からこの島に近づいた者は問答無用で射殺するか、捕獲

して実験材料にする。ゾンビの餌にするのも良い。そして不法密入国者の国籍を調べあげてそいつの住んでる国に…』

ハンドは数本の注射器がついた銃のような物を取り出した。

これは確かアンプルシューターと言って小さな注射器を飛ばす銃だ。

ハンド『この【寄生虫】をバラまく！これはまだ卵の状態だが死体に打つと…』

ハンドが射殺したアナウンサーにアンプルを打つ。

ハンド『百聞は一見にしかず』

とたんに心臓をえぐり出されたはずの死体が痙攣し、すぐにムックリと起き上がった。

ぐぐうあああ

そしてそのまま女子アナを押し倒していききに噛みついた！

女子アナ『キャアアアー！！』

《ぐちやびちやくちやあ！》

女子アナは蘇った年配のアナウンサーに首筋を噛まれて血をゴボゴボ吐きながら死んだ。

そしてすぐに女子アナも血だらけになりながらムックリと起き上がった！

ハンド『我々は琉球を死の島へ変え、世界征服の足がかりにする。我々はこれを【琉球・オブ・ザ・デッド計画】と名付ける！』

スタジオはだんだんゾンビが増えていきパニックになってきた！

スタッフが襲われ別カメラが倒され混乱するスタジオの中で最後に聞こえたのは…

『死の腕に栄光あれ…』

『死の腕に栄光あれ…』

『死の腕が世界を包む…』

『死の腕が世界を覆う…』

黒装束達が集まるので不気味な呪文のようにこの言葉を繰り返した。

そのままフェードアウトするかのやがて画面にはカラーバーが立ち放送は中断した。

俺達は口をあんぐり開けたままポカーンとTV画面を見ているしかできなかった…



LV21【死の腕】（後書き）

女子アナ質問する余裕無し。

そりゃそつだよね〜

## 武器紹介(1) (前書き)

【琉球・オブ・ザ・デッド】に出てくる武器紹介です！

武器の名称、特徴、欠点、攻撃力、使いやすさ、武器の重量(数値が低ければ軽い)、補足…と言った感じで書かれています！

琉球の世界と照らし合わせてご賞味くださいませそ ( ^ w ^ )

## 武器紹介(1)

### No.1【鉄パイプ】

皆知ってる鉄の棒。

長さは1メートル半ぐらい。

殴るには手頃でリーチもあり威力もそこそこある武器。

攻撃力 3

重量 3

使い易さ 3

### 属性【打撃武器】

### No.2【釘打ち銃】

D吾の職場にあったネイルガン。

やや大きめの釘を放つ事ができ一応飛び道具になる。

重さがある割に威力は低い…

それでも序盤では頼もしい武器。

ゾンビに対しては目潰しやヘッドショットの急所狙いが有効。

攻撃力 1  
重量 3  
使いやすさ 2

備考 本来の使い方の方が役に立つかも？

属性【飛び道具】

### No.3【ハンマー】

片手で持つサイズのハンマー。手頃で扱いやすい武器。

攻撃力 2  
重量 1  
使いやすさ 5

備考 ハンマーを使った必殺技

【ハンマースキル】がいくつか存在するらしい…

属性【打撃武器】

### No.4【手錠】

その名の通りのワツパ。

ご存じの通り警察などが主に所有してるが、警察だけが持っているとは限らない。

主な使用方法は警察が犯人を拘束する事だが、拘束されるのは犯人だけとは限らない。

プレイにも使えr y

そんな道具。

属性【拘束道具】

No.5【ニューナンプ】

警察が標準装備してるリボルバー拳銃。

38口径弾使用。

ダブルアクション動作射撃。セット可能な弾数は5発と少なめ。

攻撃力 4

使いやすさ 5

重量 3

備考 むやみな発砲に注意。

## 属性【銃火器】

### No.6【パチンコ】

たかゆき（チンパン）が使用。

たかゆきのサイズに合わせやや小型化されてる。

弾は主にパチンコ玉を使用する

ゴムは強力でまたチンパンならではの握力を生かし、射程距離2〜3メートル程度なら人間や通常のゾンビ程度の耐久性ならほぼ確実に頭蓋骨を貫通させる事ができる。

弾の面積が小さいので基本的な攻撃力は低いものの、武器の性質上ピンポイントで急所を上手く狙えば即死させる事ができる。

しかし射程距離2〜3メートルを越えると威力が落ちてしまうのが難点。パチンコの性質上、攻撃の際にはタメが必要でまた瞬時に狙いを定める瞬発力も必要とされる。

攻撃力 1〜即死

使いやすさ 3

重量 1

補足 たかゆき専用の武器なのでたかゆきしか上手く扱え無い。

属性 【飛び道具】

No.7 【バナナの皮】

たかゆきが使うブービートラップの1つ（チンパンだけに）

地面に仕掛けて上手くすれば対象を転ばす事ができる。

主に足止めや牽制に使われるが、転んだ相手は打ち所が悪ければ死亡する事もある。

攻撃力 0、1（即死）

使いやすさ 4

重量 0、1

補足 遙かいしにえからギャグに使われている古典的な小道具でもあり、天然記念物に指定されている。

これで笑いを取った者は希少価値が高いとして世界遺産指定保護条約にて【世界ベター愛護団体】によって保護される。

属性【トラップ】

## 武器紹介(1)(後書き)

武器は話しが進むに連れて更新します！



「V22」【お客さん】（前書き）

「V22」【お客さん】の回とシンクロするんですね。

## LV22【お客さん】

死の腕の恐怖のパフォーマンスが終わり俺達は5分ぐらいボーっとして俺はこつこつぶやいた。

俺『…えーと…もしかして沖縄オワタ？』

たかゆき『ウツキ』（いや世界がオワタ）』

俺『じゃあ…どうする？』

俺はたかゆきともにかを見た。

もにか『どうする？酒飲むに決まってるだろハゲ！！』

もにかはゴブゴブゴブー！と酎ハイを一気に飲み干した。

たかゆき『ウキキ！（僕も飲もう！もうやってらんねー！）』

たかゆきもゴブゴブゴブー！とビールを飲み干した。

仕方ないので俺はとりあえず風呂に入りコンビニで取って来た弁当やら何やらをみんなに配って食べた後、リュックサックに食料やらいろんな物を詰めた。

いざという時にすぐ必要な物を持って逃げられるようにだ。

たかゆきが酔っぱらいながら荷物を包んでる俺に言った。

たかゆき『ウキキ？（何だね？この手錠やロープは？）』

俺『殺った…いや！死んだ警官から拳銃と一緒にちようだいしたんだ！ロープも長くて丈夫そうだし何かに使えるかもしれんと思っ  
な！』

たかゆき『ウキキ！（なーんだ！僕はてっきり変な事に使うじゃな  
いかと期待してたのに！）』

俺『この変態チンパンめ！』

たかゆき『ウツキー！（僕は変態と言う名の紳士だよ！）』

そんな他愛も無い会話のやりとりをしていたまさにその時だった！

ぐぎやるがあああー！ー！

《バァーンー！》

『きゃあー！ー！』

『うわあー！？』

俺『何だ今の音は！？隣の部屋から聞こえたぞ！？』

たかゆき『ウキウキ！（今の音は僕が聞く限り獣のような雄叫びと  
何かが壊される音と男女の悲鳴のようだと推定される！）

俺『やべー！音が聞こえた方角からして隣の301号室に住んでる  
中年の夫婦だ！ゾンビに襲われてるのか！？』

たかゆき『ウッキー！（よく分からんがゾンビにしては雄叫びが元  
気いっぱいと言うかゴツ過ぎる感じがするぞ！）』

俺『まさか301号室のドアを壊して部屋に入ったんじゃ…！？』

『熱っ？…ぎゃあ！？腕がああー！！』

『いやあー！？あんたー！！』

俺『腕！？腕がいったいどうしたって言うんですか！？』

俺達はいつせいに部屋の壁に耳をくっつけて物音だけで隣の状況を  
推測していた！

ひきしゃ ああああー！！…！

『いやあああ！？』

《ズバツズバツズバツズバツズバアー！！》

『がはあ！？！じぶ！ぎゃふ！ぐでぶちゅ！げはあ！…！』

ひくわるるる…！…！

もにか『ぐでぶちゅ！つてwww』

俺『笑ってる場合か！！これ隣の夫婦揃ってお釈迦にされたっぽいぞ！？隣にはたしか幼稚園生ぐらいの女の子も住んでるはずだ！』

もにか『ご愁傷様です』

俺『ちよつと待て！名前エミちゃんだったかな？まだエミちゃんの悲鳴が聞こえてないし、まだ死んだとはかぎらん！ゾンビ1体ぐらいなら俺達で力を合わせれば何とかなるんじゃないか？助けに…』

もにか『行かねーよ！お前1人で逝ってこいハゲ！』

たかゆき『ウツキー！（分からないのか？隣の夫婦が殺られたスピードが早過ぎるんだ。タダのゾンビじゃないかもしれんだよD吾君。』

俺『えーと…つまりハイリスクなんですね？…』

もにか『お前が死んだら線香ぐらいさしてやんよ。けつの穴にな！』

…そう言う訳で俺達は満場一致で

【助けない】

と言う結論に至った。

隣の親子のご冥福をお祈り致します。

チーンm( )m

『パパー！ママー！』

ひきしゃあー！！…

俺『聞こえません！！聞こえませーん！！』

その後本当にしばらく何も聞こえなくなった。

俺『化け物はどこかに行ったようだな！』

俺達3人はホツとした！

…だが…

《…キイイー…！！…キイイー…！！》

俺『何だ！？この黒板をツメで引つかくような嫌な音は！？』

その嫌な音は玄関のドアから聞こえた！

俺は怖かったがこのままにしておくのもあれなんで玄関にゆっくり近づいてみた。

もにか『N Kならテレビ無いって言っとけ！』

俺『N Kな訳無いだろ！』

たかゆき『ウキキ（D吾用心しろ！スゴくヤバい感じがする！）』

俺『分かった！』

俺は恐る恐る玄関のドアの覗き穴からゆっくりと物音を立てないように外の様子を覗いて見た！

《ガチガチガチガチ…》

俺『…ひいい！？』

外を覗いた俺はあまりの恐ろしさに叫びそうになったが瞬時に手で口を押さえた！

たかゆき『ウキ！？どうした！？何がいる！？（？）』

俺『やつやつヤバい…！そっそっ外に…すっすっすっスゲエのがいる…！』

LV22【お客さん】（後書き）

果たして訪ねて来たお客さんはN Kなのか!?

次号を待て!!



LV23【D吾クルーVSデビル】(前書き)

いよいよデビルと主人公の対決！

序盤の中ボスクラスですね！

## LV23【D吾クルーVSデビル】

玄関のドアの覗き穴からは赤黒い色の化け物が見えた！

《ガチガチガチ》

歯をガチガチ鳴らして首を斜めに素早くカクカクさせている化け物は腕が4本あり、背中から生えた長い腕は頭より少し高い位置で下の方向に折れ曲がっていてそれはまるで悪魔の翼のようだった！

俺『玄関の外に悪魔がいる！動き気持ち悪っ！！』

たかゆき『ウキー！？（何やてー！？）』

何故かたかゆきが関西なまりになったが今はそんな事を気にしてる場合では無かった！

何故なら俺達が思わず大声で叫んでしまったのが悪魔にも聞こえてしまったようだったからだ！

悪魔が覗き穴を覗いたのだ！

俺『ヤバい！気づかれた！』

悪魔と目があつた俺がビククリして覗き穴から首を真後ろに下げた目を離れたまさにその時だった！！

《グサツー！！》

俺『ひいいー！？』

何と玄関の覗き穴から鋭いナイフのような物が出て来たでは無いか！？

俺はもう少しで眼球から後頭部まで串刺しにされる所だった！！

俺『これは…爪か！？』

たかゆき『ウツキー！？（どないしたんやD吾！？）』

俺『もうちょいでサンゲリアの惨劇が…！』

たかゆき『ウキキー！！（何を言うてんねん！！）』

ハきしゃああー！！』

《グサツグサツグサツグサツグサツー！！》

寧猛そつな雄叫びが聞こえ、ドアから無数のナイフ爪が素早く鉄製のドアを何度もやすやすと貫通させて来た！

俺『止めるー！！黒ヒゲドツカンじゃねーんだぞー！！』

悪魔は今度は玄関のドアをバンバンと叩いてきた！！

叩く度にドアが軋み、蝶番がグラグラして来た！！

悪魔のパワーは凄まじくこのドアじゃもう持ちそうに無い!!

俺『各自リュックを背負ってベランダにロープを持って繋いでくれ  
!!下に脱出するぞ!!』

もにか『…ったくうるせ〜な。酒もゆっくり飲めね〜や…ヒック  
』

俺達は必要な物を背負い、すぐにベランダに行くとい急いで手すりに  
ロープを巻いた!

《グワツシャーン!!》

へぐうえええ!!〜

俺『ひい!!?部屋に入って来た!!急げ!!』

俺達はやっとロープを巻き終えた!

俺『先に行け!俺はこれであの化け物を殺る!』

俺は2丁のニューナンブ拳銃を両手で握りしめた!

たかゆき『ウキー!(分かった!)』

もにか『じゃ〜頑張れよハゲ〜』

囃役を仲間が止めもせずあっさり受け入れたのにはショックを隠し  
きれなかったが

頭を撃てばいくらあいつでも…

もにか、たかゆきの順に下にロープを伝って降りて行くとベランダ越しから台所にすごいビジュアルの化け物が歩いているのが見えた！カサカサクネクネして奇妙な動きをしており、口の牙や頭から垂らした触角に赤黒く艶光りした外皮はどこか‘トービラー’（ゴキブリ）を連想させた。

化け物が俺の方に振り向いた！

俺『うわっ！？キモ過ぎだろ！死ねっ！！』

俺は2丁拳銃を化け物の頭に向けて撃った！

ハパン！パン！パン！パン！カチッ！カチッ！

4発撃ったら拳銃は空になった。

俺『弾少なっ！…殺ったか！？』

…だが…

「きしゃああー！」

化け物は元気いっぱいだった。

何故なら【弾丸を腕でガード】していたのだ！

そして悪魔みたいな化け物が手からほんの少し血を流しながらも自分の血をペロペロ舐めながら俺にゆっくり近づいて来た…！

俺『もうやだー！！こんな事なら一番先に逃げれば良かったー！！』

俺はオカマのように泣き叫び、再び【おしっこ】をたっぷり漏らしてしまった！！

LV23【D吾クルーVSデビル】（後書き）

またもやおしっこを漏らしてしまったD吾!!

このままデビルの餌食になってしまうのか!?

次号を待て!!

## LV24【トビラー?】(前書き)

トビラーとは沖縄の方言でゴキブリと言つ意味です。



## LV24【トーパーラー?】

4発の弾丸を4本の腕で弾き飛ばした化け物はじりじりと俺に迫って来た…

終わりだ…もう武器が無い!

…おや?

俺はその時洗濯機の横に置いてあった

【ゴキブリ用の殺虫剤】を見つけた!

ブランドにはゴキブリが多いので洗濯機の横に太陽光に当たらないように置いてあった奴だ!

もうこれしか無い!

化け物がべろべろ舌なめずりしながら俺に飛びかかろうとしたまさにその瞬間、俺はゴキブリ用殺虫剤を勢いよく化け物の顔に向かって噴射してやった!

《ブシューー!!》

ひぎゃあああー!!

おお!?思っていた以上に効いた!!

俺は化け物がのた打ちまわっている間に急いでロープを伝い下に降りた!

ロープを伝って下に降りる途中で3階から2階にさしかかった時に上から《ズゴン！バゴン！》と言う凄まじい音がした！

よく見ると化け物が腕をがむしゃらに振り回して洗濯機をめちゃくちゃに破壊しているのが見えた。

ふうがああああー！！

…どうやらまだ目が殺虫剤のせいで見えていないようだが、かなりお怒りのご様子（^ー^；）

急いで下に降りると下の地面ではたかゆきともにかが待っていた。

たかゆき『ウキキー！（D吾！無事で何よりやでー！）』

俺『2人共さつさと下におりやがって…っ！つかお前何で関西弁なんだ？』

たかゆき『キキー！（前に関西の方で長らくチンパンショーの営業してたもんでね！興奮するとたまに関西なまりになるんやで〜！）』

俺『そうだったのか…』

たかゆき『ウツキー！（それよりこれからどないするんやD吾！？あんな化け物がおつたら命がいくつあっても足らへんでー！）』

もにか『男なら無い知恵絞って何か良い案出せくそじじー！』

俺『お前ら隣の豪邸を見る！』

2人は隣の豪邸を見た

もにか『…やーさんの家じゃねえか！高そうな酒がありそうだな！ヒック！』

そう俺達が住むアパートのすぐ向かいはその筋のお偉いさんが住むと思われる大きな豪邸で、窓からは高そうなでっかいツボが見える。時々、手首まで和彫りの入ったおじさんが水まきをしていたり、黒服のそれっぽい人達がたくさん集まってる事から893の家に間違いは無かった。

俺『つまり俺が言いたいののはだな。やーさんの家に入ってチャカやらポン刀やら武器になる物を探してこっそり頂こうと言う訳だ！』

たかゆき『ウツキー！（やーさんと言えば人間の中でも極めて危険な人種でやないか！甲子園球場で阪神VS巨人の試合見た時にいた彼らは凄かったでー！）』

俺『大丈夫だよ！どうせこのノリならいくらやーさんでもゾンビになってるかゾンビに喰い殺されてるって！武器も取り放題だぜ！』

たかゆき『ウツキー？（うーん…どないしまひょ？）』

俺『いいからその中途半端な関西弁もどきを止める！』

ひきしやあぁー！…！

上から再び叫び声が聞こえたので見ると化け物がまるでトービークー（ゴキブリ）のように壁をカサカサと伝ってこっちに向かって来

るでは無いか！

俺『迷ってる暇は無い！やーさん家に行くぞ！』

俺らは893の家に走った！

LV24【トビーラー?】(後書き)

893の豪邸はD吾んちの隣近所に実際あります。



## LV25【パンチさん】

(Side、ミザリー)

ミザリー『D吾の奴、殺虫剤でデビルをまいて逃げるとは…一般人にしてはやるな。さすが試薬テストの際ロブ博士が目をつけてただけはある。』

ジェフ『デビルゾンビはゴキブリをベースに改造したゾンビですからね。それが仇となってしまいました…』

ミザリー『今の所仲間はD吾と丸顔アル中女と動物園から逃げ出したスーツを着たチンパンジーか。』

ジェフ『長いロープをベランダの手すりに巻いて逃げるなんて手際良いやり方…偶然でしょうか?』

ミザリー『分からん。だが奴らは隣近所の【YAKUZA】の家にいったようだ。』

ジェフ『YAKUZA?』

ミザリー『ジャパニーズマフィアだ。おそらく武器を調達しに行っただんたろう。…戦場では現地調達が基本だからな。』

ジェフ『なるほど。』

ミザリー『この島はもうすでに地獄と化しつつある。ロブが見込んだ奴らは地獄で生き残れるか?…フフ…楽しくなって来たぜ。』

(Side、D吾)

俺達は893の家にとり着いた。しかし正門は案の定閉まっていた。

俺『やっぱりダメか…裏口は開いてるかな?』

しかしやはり閉まっていた。

やっぱり考えが甘過ぎたかと思った時2階の窓が開いているのを発見した!

たかゆき『ウツキー!(ここはチンパンの僕にまかせろ!)』  
いつの間にか標準語に戻ったたかゆきが叫んだ!

俺『分かった!ゾンビややーさんには気をつける!』

たかゆきが器用に壁をよじ登り、2階の窓から家の中に侵入した!

俺ともにかはたかゆきが裏口を開けるまで下で待っていた。

ゾンビの唸り声らしき声が遠くの方から聞こえた。

俺はその時にもかの手がぶるぶるしてるのに気がつき心配して声をかけた。

俺『もにか大丈夫か?怖いのか?』



もにか『…さ…』

俺『…さ？』

もにか『…け…』

俺『…ただの禁断症状かよ!!』

そしてガチャンとたかゆきが裏口を開けて、手招きして入って来い  
と行った。

正直もにかはこの様子じゃ使い物にならないと思うので頼りの綱  
はこのチンパンだけだと俺は思った。

中に入ると良く言えば豪華だが悪く言えば成り金な飾りや置物がズ  
ラツと並んだ広い応接間が見えた。

俺『ようし各自武器になる物を探せ!』

もにか『まずは酒だバカヤロー!!』

もにかは短い足でパタパタと勝手にどこかに走って行った。

…アル中め…

たかゆき『ウツキー! (もにかっておしりがぶりぶりしてるね!)

俺達はダンスの中や階段の下など武器が隠してありそうな場所を探  
しまくったがいつころうに出て来なかった。

俺『ちくそー！出てきゃしねー！』

たかゆき『ウキキー！（でもコンビニの件と言い僕らのやってる事はまるで泥棒そのものだと思わないかね？）』

俺『良いんだよ！ドラクエの主人公だつて他人の部屋を勝手に調べて、時には勝手にツボを割って武器や金を盗って行くんだ！俺がやって何が悪いってんだ！』

？『おい！！！！』

俺『はい！？』

ドスの効いた声が後ろで聞こえたので振り向くと、そこには血まみれのドスを持って手首まで立派な彫りものがあった。これでもかかってくらいきつついパンチパーマの

【それらしき人】が立っていた。

以下この893を【パンチ】と表記する

パンチ『…お前何してるば？』

パンチが低い声のトーンで喋ってきた。

俺『ああ…いやその…ちょっと外が危険なので中に避難させてもらってます…』

パンチ『…で盗るゝもしてるば？』

俺『ああいや！…その…身を守る為に…【おチャカ】などをほんの

少しの間貸して頂けたらな〜と…！けして泥棒なぞではございませぬ！』

パンチ『チャカってこれか？』

パンチは腰に手を回すと銀色の拳銃を取り出した。

それは【トカレフ】と言う拳銃で、銀メッキ加工されてる通称【銀ダラ】と呼ばれる暴力団の間では一般的に普及されてるタイプの奴だった。

パンチ『これが欲しいのか？』

俺『…えーと…その…』

パンチ『ハキハキ喋れお前。イライラする』

俺は体全身に冷や汗をかいてオドオドしていた。

ゾンビも怖いが893も怖い。

こいつの目は完全にイッていた。

パンチ『俺はお前の頭を撃ちたい。とにかくお前を殺したい。』

パンチがトカレフの銃口を俺に向けた。

俺『ヤバい！これじゃ〜おチャカでお釈迦に！』

LV25【パンチさん】（後書き）

D 吾達はおチャカでお釈迦になってしまっのか!?

次回を待て!!

LV26【もにかVSデビル】（前書き）

もにかの初バトル!!

もにかの戦闘力はいかほどの物なのか!?

## LV26【もにかVSデビル】

パンチパーマが俺にチャカを向けた！

パンチ『脳みそブチまけるや！』

パンチが引き金を引こうとしたまさにその時だった！

？『ていやー！！』

へボツカーン！！』

パンチ『べぶふう！？』

パンチがパンチ頭から脳みそをブチまけて床に倒れた！！

俺『ああ！？…もにか！？』

もにか『高い酒ありがとよ！！ヤー公！！』

もにかはひもがついた30センチぐらいのひょうたん型のとっくりをブンブンと又ンチャクのように振り回していた！

ひょうたんの底から殴り殺したパンチの血がボタボタと滴り落ちていた…

もにか『【ひょうたん又ンチャク】！！あちよー！！』

もにかがひょうたん又ンチャクをブンブン振り回すとひょうたんが

壁にぶつかり、壁が木っ端微塵に砕け散った！

どうやらひょうたんヌンチャクはかなりの硬度らしい！

もにか『これにお酒が入ってたんだ！ウィ〜ヒック！お前も飲んでみるハゲメガネ！』

俺『はっハゲメガネ…』

俺はひょうたんとつくりに入ってる酒をちよつとだけ飲んでみた。

俺『ぶへー！！何だこの酒！？でーじ強さよ！』

その時だった！！

《バリーン！！》

へぐああああ！！！！

俺『大変だ！！さっきの化け物だ！！今の騒ぎで俺達の場所を聞きつけたんだ！！』

たかゆき『ウツキー（武器も取ったし脱出や！）』

俺はパンチの死体からドスとチャカ（トカレフ）を取り、裏口に急いだ！

しかし…

ひぎゃひぎゃー！！！！

俺『うわっ！？ヤバい先回りされてしまった！』

たかゆき『ウキキ！ウキー！（奴との戦闘は避けられそうに無いな  
…！こうなったら戦うしかない！！）』

俺『今なら武器もありはするが…3人でかかれば…何とかいける！  
…かな？』

…だが正直この凶悪そうな化け物に対して勝てる自信はあまり無か  
った…

…これでパーティーは全滅か！！

もにか『あゝうるさいうるさい。お前ら邪魔だからどいてろ。こん  
なん、もにか1人で十分だわさ』

俺『ええ！？お前何言ってるんだ！？』

しかしもにかは酒を飲みながらよちよちと千鳥足で化け物の方向へ  
向かっていった！

もにか『かかって来い虫けら！！…ヒック！』

…があああ！！…

化け物がもにかに向かって来た！

俺『ヤバいあいつ酔って完全に調子ってる！』



俺はトカレフを構えたが、もにかが前をふらふらしてるので下手に銃を撃つたらもにかに当たってしまいそうなのだった！

たかゆき『ウキキ！（いや待てD吾！もにかのあの動き…ひよっとしたら！）

化け物が4本の鋭い爪がついた腕をこれでもかかってぐらいもにかに向かってぶん回した！！

俺『ヤバい！！もにかが【三枚肉】に！！』

しかし俺の目の前で信じられない事が起きていた！！

《ぶんぶんぶん！！》

《ひよいひよいひよい！！》

俺『えっ！？全部かわした！？あんな千鳥足で！？』

もにか敵の斬撃をふらふらしながら紙一重でひよいひよいとかわしているのだ！

化け物の爪はもにかにかすりもしていない！！

たかゆき『ウキキー！（やはりそうか！これは【酔拳】だ！）

俺『酔拳だと！？…まさかそんな…！！』

もにか『酔えば酔うほど強くなる…！！』

俺『えっ！？』

その時、化け物の攻撃をよけてばかりいたもにかが反撃に転じた！  
ひょうたん又ンチャクをグルグル回して敵の爪をよける度に又ンチャクを化け物の顔や胴体に強力な一撃一撃を確実に化け物にブチこ  
んでいった！！

《ボカンボカンボツカーン！！》

へぐああああ！？！

もにか『酔えば酔うほど強くなる…ヒック！』

たかゆき『ウッキー！（やっぱり酔拳だ！【本人が言ってるから間違いない】！）』

もにかはひょうたん又ンチャクを化け物のあごにブチかまし化け物を吹っ飛ばした！！

《ボツカーン！！》

へぐぎやああ！？！

もにか『遊びは終わりだ虫けら』

その時もにかが酒をゴブゴブと口いっぱいに含んでいった！

もにかのほっぺたはまるで

【ハムスターが口いっぱいにひまわりの種をこれでもかかってぐらい

詰め込んだかのごとく】

大きく膨らんだ！！

俺『何だ！？酒を尋常じゃないぐらいの口の中に含んだぞ！？』

もにかが口の前でライターに火をつけた！

もにか『もごーもごごー！（【酒ファイヤー】！！）』

もにかが口からまるでゴジラのごとく化け物に向かって火を吹いた！！

LV26【もにかVSデビル】（後書き）

まさか酔拳を使い火まで吹くとは!?

次回を待て!!

（待つてる人いる?w）

LV27【酒豪怪獣モリス】(前書き)

まさに怪獣！

LV27【酒豪怪獣モニラ】

《ブボオオオー!!!》

もにかが口から吹いた放射火炎が化け物の体に直撃した！

「ぎゃあああああ!!!」

強力な火炎をまともに喰らった化け物は瞬時に火だるまになり断末魔をあげて地面をあちこちのた打ち回っていたが、やがて力つきたのかバツタリと倒れて手足を体の中心で閉じるとやがて動かなくなつた。

化け物の体が勢いよくバチバチ燃える度に凄まじい悪臭が漂ってきた。

俺「くっせー!!!」

たかゆき「ウキ…（まるで悪魔払いだな…）」

俺「死んだのか？虫が死んだ時は足を体の内側に閉じるんだが」

たかゆき「ウキキ！（くたばったようだ！それにしてもあんな恐ろしい化け物を倒すなんてすごい！もにかがいなければ僕達は殺られてたかもしれない！もにかに感謝！感謝！）」

俺「そうだ！もにか！お前まるでジャツキーみたいな戦いっぷりだったぞ！えらいえらい！命の恩人！…ん？」

その時もにかは再び

【ハムスターがほつぺたにひまわりの種をこれでもかってぐらい詰め込んだかの如く】

ほつぺたを膨らませていた!!

たかゆき『ウキー！ウキー！（ヤバい！こいつまた火を吹くぞー！）』

俺『嘘だろ！？酔ってるから敵味方の区別がつかんのか！？』

もにか『もごー！もごー！（死ねー！酒ファイヤー！）』

《ブボオオオオー！！！！》

俺『うわあー！！』

俺達はもにかの渦のような放射火炎を二手に別れて間一髪でかわした！

炎は壁に激突し、辺りはメラメラと炎に包まれた！

たかゆき『ウツキー！（熱っちー！お尻にかすったー！それにしても何て凄まじい火力なんだ！まるでゴジラだ！）』

俺『いや！【モニラ】だ！アルコール度数がべらぼうに強い酒をあの風船のように膨らむほつぺたに大量に詰める事で凄まじい火力が

出せるんだ！』

たかゆき『何にせよあの化け物を葬り去った程の威力だ！僕達がまともに喰らったら骨も残らず灰になるぞー！』

俺『あつ！？またほつぺたが膨らんでる！』

俺達はもにかと距離を取ろうとした！

しかしもにかが吐いた炎で893の家は既に火が燃え移っており、上手く逃げたい場所に移動できなかった！

俺とたかゆきはあつという間に壁に追い詰められてしまった！

ほつぺたを膨らましたもにかが怪獣の如く鼻息荒く迫って来た！

もにか『ふっぐー！』

俺『もうダメか！？』

たかゆき『ウツキー！（やむを得ん！D吾！その手に持つてる拳銃でもにかのほつぺたを撃て！』

俺『えっ！？そんな事したら！？』

たかゆき『ウキキー！（大丈夫！【僕がまた新しい彼女を探してやる！】）』

俺『【よし分かった！】』



俺はもにかにトカレフを向けた！

俺『さらばだもにか！』

その時だった！

もにか『おえええー！！』

《ビチャビチャビチャー！》

俺『うわあー！？』

なんともにかは火じゃなく【ゲロ】を吐いたのだ！

俺達の顔におもつきしゲロがかかってしまった！

たかゆき『ウツキー！（アルマーニのスーツがー！）』

俺『でも良かった火じゃなくて！だいたいチンパンの分際でブランド物のスーツなんか履いてんじゃねえ！』

たかゆき『ウツキー（それにしても…もにかの酔拳は強力だが体への負担も大きいらしいな！なるべくあまり使わせない方が良さそうだな！いろんな意味で！）』

俺『でもこいつ飲むなって言っても飲むしなあ』

その時、俺の携帯がブルブル震えた！

俺『あつ！？弟の【まさる】から着信だ！携帯混線して繋がりにくかったのに！』

電話を取るとまさるが出た。

まさる『もしもしD吾か！？無事か！？』

俺『ああ！いろいろあつたが何とか無事だ！そっちは！？』

まさる『俺の、つじ』（嫁はん）が暴れて、でーじ』（大変）なってるばーよ！』

俺『お前のつじ噛まれたのか！？』

まさる『買い物行った時に噛まれたって言ってた！病院行くこうにもニューズ見たら病院は特にゾンビが多いらしいし…いちおう応急処置はしてベッドに寝かしてたんだが、1時間ぐらいたらいきなりベッドから起き上がって赤ちゃんを食べようとしたばーよ！』

俺『マリア食べられたのか！？』

まさる『何とかマリアは取り上げてつじは押し入れに閉じこめたんだが…いつまで持つか分からんし、まだ小さいマリアもいるから何か行動しようにも俺1人じゃ限界がある！俺の部屋で落ち合わないか！？』

俺『分かった！すぐ行ちゅん！』

俺は携帯を切った！

たかゆき『ウツキー！（D吾の弟か！？）』

俺『ああ！嫁はんがゾンビになって赤ちゃんもいるし身動きが取れんようだ！すぐ向かわねば！』

たかゆき『ウツキー！（距離は近いのか！？この辺もおそらくゾンビが増えてるはずだぞ！）』

俺『すぐ近くのアパートに住んでる！』

たかゆき『ウツキー！（だが問題はもにかだ…気絶してるからおんぶしないといけないぞ！）』

もにか『…うん…てふてふ…』

俺『仕方ない！俺がおぶって行くよ！』

俺はもにかはおんぶした。

《ズツシリ！！》

俺『おんも！酒くさ！ゲロくさ！』

たかゆき『ウキキー！（思った事全部言ったねw大丈夫かね？）』

俺『キツいけど何とか！道中ゾンビに襲われたら援護してくれ！』

たかゆき『ウツキー！（分かった！じゃあ弟の家に出発や！）』

もにか』…うん…ウソとブルンって来て…むじやむじや…』

LV27【酒豪怪獣モニラ】（後書き）

今回は久しぶりにチラホラ沖繩の方言を入れてみました！（＾w＾）  
この作品の感想をお待ちしております！

## 登場人物紹介（1）（前書き）

以下【琉球・オブ・ザ・デッド計画】に関わる全ての人物達を紹介していく。

## 登場人物紹介(1)

No.1【D吾】

現在生存中  
感染はしていない。

### 【モデル】

作者自身  
クリリン

### 【年齢】

27歳  
沖縄人

### 【戦闘力】

パワー〓やや高め  
スピード〓普通  
スタミナ〓やや低め  
テクニク〓普通(高め?)  
根性〓低め  
悪運〓高め

### 【長所】

マイルドな正義感  
黒縁メガネ  
ハゲ  
巨根

【短所】

へタレ

すぐ、うんことしっこ漏らす

早漏

【特技】

B級ホラー小説が書ける

無駄に上手いカラオケ

頭に四星球を乗っけてた頃の孫悟飯の物まね

自分の脳みそと会話ができる

【趣味】

EロDVD鑑賞

オニー

【キャラの特徴】

この作品の主人公で山城家の長兄

しかしゾンビバザード当初からビビって糞尿を漏らしたり、敵から逃げ回ったり、不意打ちで攻撃したりとカッコ良い見せ場がほとんど存在しない。

こんなカッコ悪い主人公でいいのかと言う声もちらほら出て来ている。

しかし普段はタダのお人好しだがたまに内に秘めた残虐性を発揮する事がある。



親父やもにかに頭があがらない。

もともとは【沖縄のちよつと影がある美青年】をチャームポイントとしていたが、最近は30近い年齢に加え、お腹がぽっこり出て来たので【美中年】になりつつある。

#### 【特殊能力】

? B級ホラーマニュアル

B級ホラーの法則をたどって

【死亡フラグ】を回避できる。

? スプラッターキル

その名の通り残虐プレイで敵を葬り去る。違う特殊能力  
キャラ憑依 との併用可。

? キャラ憑依

【北野武】や【釈由美子】など違うキャラクターを自分の肉体に憑依させて敵を攻撃する特殊スキルでありキャラが憑依するとそのキャラクター（物まね）で敵に暴力をふるう。  
精神的、肉体的にも負担が大きいので多用はできない。

#### 【好きな言葉】

『30手前、気分は小6』

『です、ます、しましょう。敬語でセックス』

LV28【回り出す歯車】（前書き）

今回からミザリーの口調を殿様口調にしてみました！

前のべらんめえ口調はやはりちょっと品があれなんでw

## LV28【回り出す歯車】

(Sideミザリー)

十

ミザリー達はデビルゾンビとD吾達の戦いの一部始終を車内のモニターで見ている。

ジェフ『火炎で服に取り付けられた監視カメラが壊れデビルの脳内に埋め込まれた生命反応探知用チップから生命反応が消えた…デビルは殺られたみたいですね…』

ミザリー『何だ今のは！？あのまる顔、口から火を吹きやがった！まるでガツジーラだ！』

ジェフ『やはりこのエリアはロボ博士が言った通り戦闘力の高い一般人が潜んでいるみたいですね』

ミザリー『なあにい！？』

ジェフ『ロボ博士はゾンビバザードが起きる3年前からこの沖縄（琉球）と言う国に潜伏なさっていたのはごぞんじですよね？』

ミザリー『ああ』

ジェフ『各地域事に調査した結果、このちょうど沖縄の真ん中にある沖縄シティーがズバ抜けた奴らが多いそうです』

ミザリー『どんな奴らがいるんだ？』

ジエフ『まずD吾の父親です。米軍に属する消防士ですが普段鬼のように鍛え上げていて心身共に凄まじいパワーを持っているそうです』

ミザリー『なるほど…他には？』

ジエフ『【J i G G Y J . A . P】と言うラップユニットがいます』

ミザリー『ジギージャップ？ふざけた名前だな。何だそれは？』

ジエフ『沖縄では有名なギャングスタラッパーです。アメリカ西海岸LAのチカーノ（メキシカン）スタイルで私生活も野蛮で凶悪なストリートギャングそのものと聞いてます。構成員は2〜3名ほどです』

ミザリー『日本のラッパーか…くだらん。全てアメリカの真似じゃないか。黒人のお前から聞いてどうだ？』

ジエフ『って言うか私はヒップホップ自体が嫌いなんです』

ミザリー『なあにい！？』

ジエフ『今現在、別の調査部隊がジギーらしき人物を見張っています。身長が小さくて全身刺青だらけの男とスキンヘッドでヒゲを生やした巨漢の男の2人がいるそうでジギーのメンバーに間違い無さそうです。チビの方が敵対してるギャングのメンバーを数人殺害した容疑で逮捕されて今日パトカーで沖縄警察署に護送されている』

はずですが…』

《ピピー！ピピー！ガガガ…！》

その時車内の無線がなった！

無線『こちら02部隊！現在エリアG！報告！ジギーのメンバーの1人のチビの方は護送中ゾンビハザードが起きた後その混乱に乗じてパトカー内の警察を何らかの方法で全員殺害して逃亡した模様です！』

ミザリー『ほう？』

無線『その後チビは警察の手入れ対策として隠していたと思われる武器を格ポイント事に回収して巨漢の方と合流！合流後もゾンビや一般人問わず殺害や強奪、レイプを繰り返しております！』

ミザリー『…こいつらはD吾達とは仲間なのか？』

ジエフ『違いますね。お互い顔や名前は知っていますがむしろこの状況ではお互い敵同士になる確率が高いですね』

無線『尚、ジギーは軍人や特殊部隊なども襲って殺害し、武器や金品、食料等を奪っているようです！戦闘力は非常に高く性質は非常に好戦的で極めて残忍！近距離で接触したら交戦を避けるのは困難なので充分用心してください！』

ジエフ『分かった！お前らも充分気をつけるように！通信終了！』

ミザリー『…ふん！ギャング気取りのチンピラ共が！』

ジエフ『特殊部隊も殺害してるから真似とかギャング気取りってレベルじゃないですよ！それにエリアGってすぐ近くですよ！鉢合わせになったらかなりヤバいんじゃない？！』

ミザリー『アマチュアにしてはやるようだが、所詮はアメリカの二番煎じ、カチ合ったらこのミザリー様が本物のアメリカン魂スピリットを叩きこんでやるわ！』

ジエフ（それにしてもD吾達とジギージャップが仲間じゃなくて良かった…徒党を組まれたらさすがにいくらミザリーでもヤバいだろう…）

ミザリー『貴様何か言いたそうだな？』

ジエフ『あ…いや…他にもまだいます！』

ミザリー『まだいるのか！？』

ジエフ『【車椅子の郵便屋さん】です』

ミザリー『なあにい！？』

ジエフ『10代の頃に飲酒運転で事故を起こして【両足を膝の付け根から切断】両足を【義足】で補って車椅子で生活しています。』

ミザリー『ふん』

ジエフ『その後自暴自棄になり【地球に巨大な隕石が落ちればいいのに】が口癖でしたが友人のアドバースにより郵便屋さんになり、自ら特殊改造を施した【スーパー車椅子】で荷物を配達してるそうです。ハンディを背負った郵便屋さんとして地元メディアでも取り上げられたそうです』

ミザリー『なるほど…そいつは戦闘力は高いのか？』

ジエフ『それは彼の車椅子と義足に秘密があるそうです。尚データによると彼の名前は【しゅん太】D吾達の仲間だそうです。』

ミザリー『なあにい！？』

《ピピー！…ガガガ！》

ジエフ『また無線か！？』

無線『こちら03部隊！現在エリア具志川シティー！』

ジエフ『沖縄シティーからけっこう離れた町だな？』

無線『はい！現在ターゲットのしゅん太を追跡中！もの凄い早さで沖縄シティーに向かっています！目的はD吾達と合流する為と思われるます！』

ミザリー『なあにい！？…って言うか凄い早さで向かってるってまさか…！？』

無線『はい！車椅子です！ターボエンジンが搭載してるのか、車ま

でも追いつくのがやっとの有り様であります！！』

『ミザリー』なめにい！..?』



LV28【回り出す歯車】（後書き）

久しぶりの投稿なのにまたしてもこいつらの会話だけで終わってしまいましたw

この作品の感想、ご意見をお待ちしておりますo(^-^o

LV29【もぐもぐウォッチング】（前書き）

最近ノーマルゾンビさん達を出して無かったんで今日はゾンビ特盛りで！

## LV29【もぐもぐウォッチング】

(Side、D吾)

俺『もにかをおんぶしての移動はキツいな』

たかゆき『ウツキー！（前方にゾンビ発見！）』

見ると各所いたる所にゾンビがいてそれぞれがお肉をもぐもぐしていた。

俺『…ゾンビさん達はお食事中的ようだからけっして邪魔しないように通らなければ！』

…しかし興味深いのでバレないように通り過ぎながらゾンビさん達を【もぐもぐウォッチング】する事にしました（^ー^）v

194

《ぢゅぱっ！ぢゅぱっ！》

目玉を飴玉のようになしゃぶるゾンビさん。

ちゅぷちゅぷ舐めてたが、やがて飽きたのかそのまま

《ぐちゅあー！》

と口の中で噛み潰してしまいました（^ー^）v

《ビッチャアーン!》

手で千切った肉片をこれでもかってぐらい顔に叩きつけるゾンビさん。

湿布のように口元にくっついた肉片を

《ずずうー!》

と勢いよく吸って喰べちゃいました) )

ひぐがっ!ぐがあっ! }

ひぎゆるるる! }

手に取った肉片をバーゲンセール品のごとく取り合うおばさんゾンビさん達。

やはり生きてた時の習性が色濃く残るのでしょうか?

微笑ましい光景ですお (^ ^ )

…何とか通り過ぎながらまさるのアパートの前についた!

…しかし…

《ぐちゃぐちゃ…》

俺『何でアパートの階段の前でお食事会を…』

たかゆき『ウツキー！（それは彼らの考えが【ストリートその物】だからだ！）』

へうがあ〜！〜

俺『シヤレた事言ってる場合じゃないぞ！こつちに気づいた！』

たかゆき『ウツキー！（仕方ない！こうなったらD吾の持つてる拳銃と僕のパチンコで撃退するしか無い！）

俺とたかゆきは銃とパチンコで攻撃して1体ずつ倒していったが後ろの方からもわらわらとゾンビ共がやって来た！

へうがあ〜！〜

へ…に…く…く…

俺『くつ…ヤバいぞ！囲まれた！』

たかゆき『ウキキー！（もうおしまいやー！）』

だがその時だった！！

? 『【車いすアタック】!!!』

《グシャアツ!!グチャベチャーン!!》

俺 『何だ!?ゾンビ達が吹っ飛んで壁に叩きつけられたぞ!?!』

? 『【足は無くても足まわりOK】!!!』

俺 『まさかお前は!?!』

しゅん太 『ポストマンしゅん太!只今参上!』

俺 『おま…完全に【出オチ】じゃねーか!?!』

LV29【もぐもぐウォッチング】（後書き）

新キャラ、車いすの郵便屋さんしゅん太登場！

自分で書いててこの話し大丈夫か？って思う30手間のアラサー作家WWW

【LV30】80年代風ドタバタコメディ【前書き】

どーも崖っぷちニートです！

久しぶりの鬱プです！



【LV30】80年代風ドタバタコメディー】

しゅん太『おいらが来たからにはもう大丈夫でやんすよお師匠さま  
』！』

リスのような顔したしゅん太はキラキラした目で俺を見つめながらそう言った。

そう。車いすに乗った彼は俺の弟と同じ年の友達なのだが、彼はどう言う訳か俺の事をしこたまリスペクトしている。

しゅん太『おいら、お師匠さまの事お守りするでやんす！』

そして俺の事を恥ずかしげも無く

【お師匠さま】  
と言っただ。

こいつはこの世で唯一、俺の事を尊敬…いや崇拜している後輩と言えるだろう。

しゅん太『沖縄がゾンビだらけになってやっとお師匠さまのB級ホラー知識が生かされる時代がやって来たでやんすね！』

俺『いや知識って言っても実際生き残る為にはそれだけじゃ…』

しゅん太『いやまたまたご謙遜を！おいら見ましたよ！ネットの小説日記！かなり好評でやんすね！さすが大天才はパンピー達とは一味も二味も違うでやんすね！』

俺『好評って言っても数にしたらそれほどでも無いぜ！一部の物好き達が読んでくれてるってレベルだよ！しかも読むのタダだし！』

しゅん太『おいらとお師匠さまが組めば鬼に金棒でやんすね！』

たかゆき『ウツキー！（足は無いけど頼もしい後輩ではないか！）』

俺『確かにしゅん太の乗っている改造車はちょっとやそつとの衝撃じゃ壊れないし、階段だってスイスイ登れる優れものだからな！』

しゅん太『おいらの事よりお師匠さまの自慢話が聞きたいでやんす！是非ともお聞かせくださいでやんす！』

俺『えっ？そうか参ったな〜…そうだな〜…あれは確か俺が…』

しゅん太『さっ！こんな所で油売ってる場合じゃないでやんす！グズグズしないで行くでやんす！』

俺『ぐっ…！？こいつ…！』

俺達は弟のまさるが住んでるアパートの階段を登り、まさるの部屋のドアを叩いた。

するとまさるが出て来た。

まさる『おっ？ハゲやつと来やがったな』

俺『うるせー！この前歯野郎！』

しゅん太『お師匠さまに向かつて何て口の聞き方だ！でっかい前歯しやがって！』

たかゆき『ウツキー！（本当だ！D吾の弟、前歯でっかい！）

…俺の弟のまさるは腰まで届くゆるくウェーブがかった長い髪の毛が特徴だった。

しかし長いのは髪の毛だけじゃ無い。

前歯もだった。

その2本の長くて太い前歯は誰が見ても異様にデカく、また隙っ歯なので

【Skipper】

と言っあだ名があった。

まさる『うるせーぞお前ら！！調子のってんじゃないねー！！』

その時、俺がおんぶしていたもにかが目を覚まし、まさるを見るなりじつ言った。

もにか『もごもごうるせーなーお前の前歯弟。こいつ口じゃなくて前歯で喋ってんじゃねーの?』

それだけ言うともにかは再びグーグーと寝息を立てて深い眠りについた。

まさる『…お前のアル中彼女こつから下に放り投げていいか?』

俺『いやこいつはまだいろいろ使い道があるから放り投げるのはその後にしる!』

へがああああ!!--!!--!!--

俺『何だ今の雄叫びは!?!』

まさる『こんな事してる場合じゃない!俺の嫁が暴れて大変なんだ!何とか部屋の一室に閉じ込めてあるけど…!』

とりあえず俺達はまさるの部屋に入った。

?『ばーぶ!!--!!--!!--』

俺『うわ!?!…何だマリアか…!』

まさるの娘の【マリア】である。

現在2歳になったばかりの赤ちゃんだ。

マリア『ばぶぶぶぶー!!--!!--!!--』

まさる『あの部屋に俺の嫁を閉じ込めている』

まさるが部屋の一室を指差した。

確かにうなり声とドアをバンバン叩く音が聞こえる。

…その時だった!!

《ドッカーン!!》

ドアが壊れて中から青ざめたまさるの嫁はんが現れた!

ふうふう

たかゆき『ウッキー（何てパワーだ!）』

俺『お前の嫁はんモロゾンビになってるじゃねーか!』

まさる『み〜わ…（嫁はんの名前）』

俺『仕方ない!!…逮捕するう〜!!』

しゅん太『あつ!?!』【お師匠さまのモミアゲが急にワサワサと伸びてる!】

たかゆき『ウキキー！（）【とっつあ〜ん！】（）』

俺は瞬く間にまさるの嫁はんを押し倒し、まさるの嫁はんの腕を後ろに持つて来て手錠で拘束した！

俺『ロープを持つて来い！足も縛って完全に動きを封じるんだ！』

たかゆきがどこからか持つて来たロープで足を瞬時に縛り上げた！

まさる『みーわー！』

たかゆき『ウツキー！（一丁あがり！）』

俺『変なプレイとはちゃいまっせ（キマッタ）』

しゅん太『すげー！！カッコいいー！！』

俺『お前の嫁はんだからいちおう殺さないでやった。ありがたく思え』

しゅん太『さすがお師匠さま！お見事な腕前でやんす！』

しゅん太が嬉しそうに車いすでピョンピョン飛び跳ねた。

しゅん太の車いすは

【ホッピング機能】

がついているのだ。

まさる『人んちでピョンピョン飛び跳ねるんじゃねえ！この義足野郎！』

しゅん太『…は！？すっかり忘れてた！そう言えばおいらここに来る時に妙な【ファイル】を拾ったんでやんす！』

しゅん太は俺に妙なファイルを渡した。

俺『何だこのファイルは？…ん？…こっ！こっ！これは…！？』

【LV30】80年代風ドタバタコメディ【後書き】

新キャラ多し！

そしてしゅん太が渡したファイルとは！？

次回を待て！！



## 寄生虫（前書き）

ども！

1ヶ月半ニートで家賃払えなくてアパート追い出される寸前の作者  
です！

小説書いてる場合じゃないけどアップします（＾w＾）

## 寄生虫

【うじ虫型寄生虫】（始祖）

英訳名

Zombie・Maggot

製作者（R&S）

体長2〜3ミリ程度

我々が開発した寄生虫の初期型。

アフリカや東南アジアに生息する肉食で動物の皮膚や内臓に寄生する性質のあるハエの幼虫（うじ虫）をベースにして品種改良した物。

【特徴、性質】

通常のうじ虫と外見は変わらない。

別名【ゾンビワーム】とも言うべきこの寄生虫は人や動物、あるいは一部の植物にも寄生する。

寄生されたあらゆる生物は寄生虫により脳細胞を浸食され徐々に寄生虫の支配下に陥る。

その後寄生された生物は1度活動停止状態（死亡）になり、復活した後細胞を再構築されていわゆる【ゾンビ】と言う状態になる。

ゾンビの詳しい詳細については次項の ゾンビ ファイルに別記。

1度感染すると肉体内部（脳、皮膚、内臓、筋肉、眼球、鼻孔、口腔、）で無性生殖により卵をあらゆる場所で生み散らかし多大なる寄生虫が増えた所でゾンビの状態として【完成】する。

寄生虫は新鮮なたんぱく質などの栄養分を好む為に宿主に生きた人間や動物を襲わせて栄養分を補給する。

その為に宿主は血肉を求めて歩き回る生きた死体になり果てるのである。

口から触手や電気信号を放ちこれにより宿主の脳や神経回路にアクセスして宿主を操作する事ができる。

寄生の際に不必要な脳細胞を破壊するが、容易に獲物を捕食する際、つまり攻撃や防御に有利な記憶は残る場合がある。

【ZW】により寄生虫の寄生進行を遅らせる事が可能。

【ZW】の詳しい詳細は次項 ZW のファイルに別記。

なおゾンビの住む環境や摂食した生物のDNAを取り込むなど、条件によってはゾンビを変態（進化）させる事ができ、より強力な個体にする事ができる。

…組織の連中の強力なバックアップによりこの素晴らしい寄生虫が完成した。

わしが子供の頃からの夢だった念願のゾンビを現実世界に作り上げる事ができたのである。

やっとこの島を使ってたくさんの実験ができる。

考えただけで勃起して来たわい。

R・Z

寄生虫 (後書き)

さあ〜どうなる事やら！

(作者も)

【LV31】豆缶は最後まで取っておく（前書き）

お父さんから豆缶の要求を承りました。

LV31【豆缶は最後まで取っておく】

俺『こ…これは寄生虫のファイル…!』

まさる『て事はこのつじ虫の寄生虫に感染するとゾンビになるって事か!』

たかゆき『ウツキー! (わっかかりやすーい!)』

俺『それにしても面白いファイルだな〜! バインダーにはさんど〜! また見つかるかも知れないし!』

まさる『お前こついうの好きだからな〜。しかも最後にこれ書いた奴 勃起したらしいぜ! どんな変態だよ!』

俺『まあ〜気持ちはこちらからでも無いがな。』

まさる『えっ!?!』

《プルルル!》

俺『あっ!?! 俺の携帯に着信…【親父】からだ! もしもし!?! 親父!?!』

親父『D吾か?』

俺『俺だよ! まさると一緒にいるよ!』

親父『豆の類は持ってるか?』

俺『…豆?…ああ、食料袋に豆缶が2缶ほどあるよ』

親父『じゃ、今すぐ実家に豆を持って来なさい』

俺『えっ!? 親父今の状況分かってんの!?』

親父『やかましい!! 親父は今すぐ豆を食いたいんだ! 豆を使って【豆カレー】を作るんだ!』

俺『まっ…豆カレーって…外はゾンビだらけですんげー危険なんだから!? 親父の豆カレーの為に俺ら命かけるのか!?』

親父『そうだ。カレーだけにな』

俺『そ…そんなつまんねー親父ギャグ聞いている心の余裕もねーんだけど?』

親父『ばっかもーん!! ゾンビ如きが何だ!! あんなもん親父は既に3ヶタぐらいやつつけたぞ!』

俺『ええー!? 嘘だろ!?』

親父『親父は軍でいつも鍛えてるんだ! あんなヤワな腐った死体如きに負けるか! それよりD吾! お前まさか死体が怖くて豆を持って来れないとか言うんじゃないだろうな!?』

俺『えっ!? もちろん言うつもりだけど!?』

親父『ばっかもーん!! お前ゾンビと親父どっちが怖いと思ってる



んだ！？今すぐ持って来ないとお前の顔を八チの大群に刺されたくらいにボコボコにして親父のビッグスクーターで引きずり回してやるぞー！！』

俺『わっ…分かったよ！豆缶持って行くよ！』

親父『最初からそう言えば良いんだ！このばかちんが！』

親父はそう言い放つとぶつきらぼくに電話を切った。

まさる『おっ…親父は何て？』

俺『いつ…今すぐ豆缶を持って来いって』

まさる『何かそれ！？冗談だろ！？』

俺『まっ…豆カレーを作りたいって…』

まさる『嘘だろー！？…ああ〜でも親父なら言いかね〜！』

俺『親父は豆類が大好きだからな』

たかゆき『ウツキー！？（D吾のお父さん豆持って来いって！？どんなお父さんの！？）』

俺『俺らの親父は立派な口ヒゲを生やしてて、誰に対してもやたら偉そうで強引で超パワフルな55歳の親父なんだ』

まさる『親父の仕事はアメリカ軍所属の消防士で仕事中の訓練やプライベートですらも毎日鬼のように体を鍛えて健康管理も怠らない』

俺『俺達がチヨンボをしたら問答無用でぶっ飛ばされた。基本スパルタで超頑固親父さ』

まさる『でも確かにあの親父はなら地獄でも生き残れるな』

俺『もう既にゾンビ3ヶタぐらいやっつけてるらしいぜ』

まさる『マジかよ!?!…ああでも親父ならやるな。鍛え方が違うもん』

たかゆき『ウツキー!?!(ちょっと待って!?!君達のお父さんはそんなに強い!?!)』

俺『うん。バキのお父さんぐらい強いかもな。俺弱いけどw』

たかゆき『ウツキー!(行こう!)』

俺『え?』

たかゆき『ウキキー!(だってそんな強い親父なら絶対メンツに加えた方がいいーもん!すげー!もしかしてこのメンツならこのゾンビ地獄を生き残れるかも知れないぞ!)』

しゅん太『さすがお師匠様のお父さんでやんす!これで生き残れる確率もグリーンと生き残れるでやんす!お師匠様とまた一緒に【風俗】に行けるでやんす!』

俺『し〜!』

もにか『ん?ふーぞく?』

俺『いや何でもない!じゃー今から実家に豆缶を持って行こう!俺達は生き残るんだ!』

【LV31】豆缶は最後まで取っておく（後書き）

お父さんが作る豆カレーはそれなりにおいしいらしいです。

LV32【血まみれ幼女】(前書き)

久しぶりのアップ！

## LV32【血まみれ少女】

俺達は豆缶を持ってアパートの階段を降りた。

階段を降りる途中で5体のゾンビが階段を上って来た！

まさる『やべー！わらわら来てやがる！』

ハあああ〜

しゅん太『ここはおいらに任せるでやんす！』

しゅん太は何を思ったのか義足の右足をゾンビの群れに向けた！

しゅん太『義足ミサイル！！』

何としゅん太の義足が【ロケットミサイル】のようにゾンビの群れに飛んでいった！！

ぐちやびちやぶりゅっ！！！！

ゾンビ共は義足ミサイルに押されて一瞬で【ミンチ】のようになり、周りは【大量のトマトソース】をぶちまけたかのようになった！

そして義足ミサイルがブーメランのようにしゅん太の右足に元通りスポツと収まった。

まさる『しゅん太！何だ今の技は！？』

しゅん太『郵便屋さんは強盗に狙われやすいから護身用でやんす！義足ミサイルは強力な技でやんすがエネルギーの消耗が激しいから多用はできないでやんす！』

まさる『これは武器つか兵器のレベルだな！』

俺『…これ強盗に使ったら明らかに過剰防衛と兵器所持で捕まるぞ』

たかゆき『ウキキー！（戦う障害者！）』

なんとか血肉だらけの階段を降りると何やら歌が聞こえた。

？『ばくばくもりもり〜みんな食べるよ〜』

俺『ん？』

？『ずるずるべたべた〜腸が飛び出す』

まさる『駐車場の方から昔に流行ってた歌が聞こえる…しかも歌詞が若干違うような…』

俺『マザーグースの童謡並みのエグさだな…』

まさる『あつ！？小さな【幼女】が俺の車の前で【縄跳び】してる  
！！』

俺『この子 隣に住んでるエミちゃんだ！てっきり襲われたと思っ  
たけど無事だったんだ！』

まさる『おい…あの子 様子が変だぞ？歌いながら縄跳びしてるけ  
ど…足元に【死体】がある』

俺『しかも腹がぼっかりあいた死体だ…』

エミちゃん『ががつがつむしゃむしゃ〜みんな食べるよ ずるずるべ  
ちやべちや目玉 飛び出す〜』

俺『エミちゃん？本当は俺はエミちゃん達が襲われてる時に助けに  
行くつもりだったんだけどね。周りの汚い大人達の圧力で…』

俺達はエミちゃんに近づいた。

するとエミちゃんの口の周りは血がベッタリついていた！

俺『血！？』

まさる『この子【腸で縄跳び】してる！』

エミちゃんがニッコリと血だらけの口を開けて笑った。



すると猫娘のように口が割けて鋭い牙がズラリと並んでいた！

俺『何でそんな事に!?!』

エミちゃん『あのね、ネコちゃんに噛まれちゃったらこつなっちゃった〜』

さらにエミちゃんの目は大きくなってつり上がり、耳も尖ってさらには爪も20センチぐらいの長さになった！

エミちゃん『シャアアア〜!』

まさる『もう人間じゃない!』

エミちゃん『にーにー達のお肉もちよ〜だ〜い』

しゅん太『義足ミサイル!』

しゅん太が義足ミサイルをエミちゃんに向けて勢いよく飛ばした!!

エミちゃん『クワックワツ〜!』

エミちゃんが腸の縄跳びロープを目の前に突き出し、真横にピーンと張った状態にした!

義足ミサイルがエミちゃんに飛んで来た！

ビヨーン！！

何とエミちゃんは義足ミサイルを腸で防いだのだ！！

逆に義足ミサイルは弾かれてそのままブーメランのように俺達に向かって来た！！

一同『うわあー！！！！』

ドッカーン！！

俺達は間一髪で弾かれた義足ミサイルをかわした！

コンクリートの地面には義足ミサイルが突き刺さっていて地面には大きなヒビがいくつも入っていた！

俺『こいつ！腸でミサイルの弾道を変えやがった！！』

まさる『この猫娘みかけによらず強いぞ！！』

しゅん太『オイラの義足ミサイルが効かない！？…エーン！！』

しゅん太は泣き出してしまった！！

エミちゃん『皆さんポツクリまた明日 あの時って何でしょね？

』

エミちゃんが鋭い爪を振りかざして俺達に向かって来た！！

LV32【血まみれ幼女】（後書き）

義足ミサイルが舞い、血まみれ幼女が腸で縄跳びをする展開はまさにB級ホラーの世界ですね。

【LV33】上から読んでも下から読んでも同じ名前の必殺技【前書き】

この物語は事実に基づいた記録です。

【LV33】上から読んでも下から読んでも同じ名前の必殺技【

エミちゃんハケタケタケタ…」

エミちゃんの不気味に笑い出し、しゅん太は自慢の義足ミサイルを腸で弾かれて泣き出してしまった…

俺「…さてさてどうしまよう？」

たかゆき「ウッキー！（久しぶりに僕ちんの出番や！）」

たかゆきはそう言うとおもむろにリュックから手榴弾みたいな物を取り出した。

俺「爆弾！？」

たかゆき「ウキキー！（いや【催涙弾】や！）」

たかゆきはエミちゃんゾンビに催涙弾を投げた！

《ドッカーン！》

俺「…でも神経の通ってなさそうなゾンビに催涙弾って効かないんじゃない？」

エミちゃん、ケホッ！ケホッ！

俺「効いてるし！」

たかゆき「ウッキー（あのタイプのゾンビは初めて見たけど神経の通ってるS型っぽいから多分効くと思ったんだよね）」

俺「S型！？」

たかゆき「ウッキキ…（あっ！…いや何でもない…）」

まさる「すげー！何でこのチンパン催涙弾なんか持ってるんだ！？」

まさるはでっかい前歯をさらして驚いていた。

たかゆき「ウッキー！（そんな事より今のうちに車に乗るんや！）」

俺達はみんなで車に乗った。

しゅん太は車椅子の肘掛けにあるボタンを押して車椅子をコンパクト化してトランクのようにした。

この機能によってスーパー車椅子を持ち運び可能な形態にできるのだ。

そして俺達は車を実家へと走らした

しかしようやく催涙弾の効果が切れたエミちゃんゾンビが走り出した俺達の車のアンテナに向かって腸をロープのように投げた！

そしてインディージョーンズの如くアンテナに腸を巻きつけ、引きずられながらもついて来たのだ！

まさる『そんなアホな！』

そして腸をたどり、ピヨンとハネるとルーフに登って歌を歌いながらルーフをボコボコ殴りだした！

エミちゃん『フルフル ボッコボッコ ルーフ殴るよ ズルズルベ  
タベタみんな飛び出す』

《ボッコーン！ボッコーン！ボッコーン！》

意外にもパンチの一つ一つが大変重くルーフはボコボコに変形してきた！

俺『車の屋根が壊れそうだ！こんな小さい体のどこにそんな力がある？』

たかゆき『ウッキー！（この問題は僕の【必殺技】で解決する！）』

たかゆきはそう言うと窓からルーフに身軽によじ登った！



俺『たかゆきいつたいどんな必殺技を出すって言うんだ!?!』

そして屋根の上から気合いの入った声が聞こえた!

たかゆき『チーンパンチ!!!』

…ここから様子は見えないが、ぶっちゃけ【ただ力を込めただけのパンチ】である事には間違いなかった。

今までのたかゆきの感じでもっとトリッキーな技を期待していた俺は若干ガツカリしてしまった…

《ポツカーン!!》

しかしチンパンチの威力はかなり強烈らしくエミちゃんゾンビが後ろに吹っ飛んで行くのが後部座席から見えた。

しかしエミちゃんゾンビは地面に転がりながらもすぐに体制を立て直してまた俺達の車を追いかけて来たが、路上に鳩が歩いてのを見ると鳩を捕まえてムシヤムシヤと喰いはじめた。

返り血がのり代わりになったのか鳩の羽がたくさんエミちゃんゾンビにくっついてた。

たかゆき『ウツキー…（コンクリートの壁をも砕くチンパンチを食らってすぐに立ち上がるなんて…攻撃力…防御力…スピード…この僕が煙に巻くのが精一杯とは…！）』

俺『でも危ない所だったな。たかゆきがいなかったら俺達がああ鳩みたいに死んでいたな』

そんなこんなで俺達はやっと実家にたどり着いた。

命懸けの冒険をして親父に豆を届けに来たのだ。

正直、ここまで来た達成感と感動感はハンパなく俺達はちょっと泣いていた

実家のチャイムを鳴らすと立派な口ひげを生やした俺の親父が出て来た。

そしてこう言った。

親父『遅いじゃないか！豆一つ運ぶのにどんだけ時間をかけるんだこの糞馬鹿野郎共が…！』

【LV33】上から読んでも下から読んでも同じ名前の必殺技【後書き】

何て感動的な話でしょう。

【トムソンピ】(前書き)

D 吾の愛犬マルチーズとおちやめなぶち猫タマが登場！

## 【トムソン】

十  
実家にいる親父のもとに命がけて豆缶を届けたD吾達。

しかしちょうどその頃、実家の近くでは1匹の犬と1匹の猫による  
すったもんだの展開が行われていた。

犬の名前はトム。

D吾の実家で飼われている　の白いマルチーズ犬である。

そして猫の名前はタマ。

実家からすぐ近くのT地区3丁目に住んでるぶち猫である

D吾達が豆缶を実家に持って来る少し前にこの日もトムはいつもの  
ようにD吾宅から脱走して自由気ままな散歩ライフをエンジョイし  
ていた。

トム『いや〜自由って最高だワン！でも腹減ったら家に帰れば良い  
から野良犬みたいに危険も無いし、お気楽な座敷犬に生まれてほん  
と〜に良かったワン！』

トムは片足をあげて草むらに勢いよくおしっこをし始めた。

一方その頃、ぶち猫のタマがD吾宅の近くにやって来た。

タマ『腹減ったニヤ〜！白装束のニヤンゲン達が放したZWって書かれたネズミを食べたら今 巷で流行りのゾンビって奴にニヤっちやったニヤ〜』

既にタマはゾンビ猫と化していた。

タマ『ゾンビにニヤったらやたらお肉が喰いたくてしょーがニヤいニヤ〜』

その時タマの目に草むらで無防備に片足をあげてたつぶりとおしっこをしているトムの姿が見えた。

タマ『あれはD吾の家で飼われてるトムヤンクン！』

タマが後ろから近づいて見ると片足を上げたままのトムのお尻の下でぶらぶらと揺れる2つの球体が見えた。

タマ『あれはトムやんの金玉だニヤン！おニヤかも空いた事だし、あれをいただくニヤン！』

タマはトムの玉に狙いを絞ってほふく前進でおしっこをしているトムの玉にしっぽをふりながらスリスリと近づいた。

タマ『これはまさにステルスミッションニヤんだニヤン!』

トムは相当おしっこをガマンしてたらしく、放尿はしばらく終わり  
そうも無かった。

トム『ふ〜!おしっこいっぱいガマンしてからのマーキングってと  
ーっても気持ちがいいもんだワン!』

タマ『ターゲットロックオン!もうすぐ射程圏に入るニヤン!』

トムがおしっこを終わらそうとしたまさにその時、スリスリと地べ  
たをほふく前進で近づいて来たタマがトムの球体めがけてミサイル  
のように飛び出した!

238

タマ『発射!』

トム『え?』

《ガブー!》

トム『うっひゃあー!』

…タマに玉を取られたトムの魂の叫びが地面にこたましてトムは地  
面に倒れた…

そしてトムゾンビとなって復活した。

人間と違い小型犬は体のサイズが小さいので寄生虫がすぐにまわって人間よりゾンビになるのが早いのである。

タマ『あ〜うミヤかったニヤ〜ン』

トム『タマちゃん！よくもワンの玉食ったな〜！』

タマ『あれ？よく見たらあと1個だけニョこってるニヤン〜！』

トム『うるせー！ワンの玉返せワン〜！』

タマ『うるせー！あと1個の金玉もよこすんだニヤン〜！』

…2匹はしばらくワンワンニヤンニヤン金玉をめぐって大喧嘩していたが、ゾンビ同士で争ってもしょうがないので止めた。

タマ『ケンカしたらまたおニヤか空いてきたニヤン…』

トム『そーだ！近くにD吾の家があるからD吾達を食べよう〜！』

タマ『うミヤくいくかニヤン？』

トム『さっき車に大勢乗って家に向かうのを見たんだワン！D吾はワンの事が好きだし、頭が弱いから楽勝だワン〜！』



タマ『それいいニャー！また金玉ゲツチューだニャン！』

2匹は生前？から総じて食いしん坊なのである。

トムは食欲の為なら飼い主のD吾を裏切り、恩を仇で返す事などへ  
つちやらだった。

猫の相方も同様だった。

そして2匹の血に飢えた野獣はほく前進で地面をスリスリしながらD吾宅に向かった…

【トムゾンピ】（後書き）

肉食系と化したこの2匹の野獣達にD吾達は喰われてしまうのか!?

次回を待て!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6888t/>

---

【琉球・オブ・ザ・デッド】

2012年1月4日11時48分発行